

東京古田会ニュース

— 古田武彦と古代史を研究する会 — No.216 May.2024

代 表：安彦 克己 e-Mail saitaka7078@yahoo.co.jp
編集発行：事務局 〒212-0024 川崎市幸区塚越3-370 斎藤 隆雄 TEL/FAX 044-522-7500
郵便振替口座 00110-1-93080 年会費 4千円
口座名義 古田武彦と古代史を研究する会

目次

*【小論】天武の夢・平城京 杉並区 新庄宗昭……………①	*大宮姫伝承を訪ねて 東久留米市 村田智加子……………④
*古代都市成立の指標 ―都城論争の収斂を求めて― 京都市 古賀達也……………⑧	*古代史エッセー79 中大兄の殺戮 日野市 橘高 修……………⑩
*東鯉へとうてい〜人と倭人 八尾市 服部静尚……………⑪	*記紀の皇統譜にいた倭の五王 大田区 橋本正浩……………⑬
*神功皇后研究(その1) 岩見沢市 和田高明……………⑯	*和田家文書をみちづれに「和田家 文書と国東半島」の旅に参加して 白井市 讃井優子……………⑱
*『和田家文書』備忘録6 佛頂寺跡に建立せし中尊寺 港区 安彦克己……………⑳	*「東京古田会」月例会報告⑤ ※文責…新保高之……………㉒
*掲示板 ……………㉔	

【小論】天武の夢・平城京

杉並区 新庄宗昭

◆藤原京施工年代異聞

先に、小論「藤原京施工年代異聞」を東京古田会ニュースに寄稿した。それは大和平野の開発過程を遺構事実の新たな解釈によって提示したものである。そこでは、大和古道特に中ッ道について、その建設年代は藤原京施工年代を遡らないことを説いた。藤原京が施工された後にその関連整備工事として中ッ道は建設されている。ところが、中ッ道は上ッ道、下ッ道とともに壬申紀天武元年七月条「八口の防衛」記事の中に古京の戦闘場面として明記されている。したがって、中ッ道よりも先に建設された藤原京は天武元年壬申乱の時には実在する都城ということになる。これを敷衍して本稿を進めたいと思う。その前に書いておきたい。「藤原京」と呼ぶことは右に述べたように未来の先取りであり、そもそもおかしい。せっかく喜田貞吉が名付けた名前ではあるが、「藤原京」を改め、『書紀』孝徳紀から天武紀上まで名前の載る「倭京」をこれに当てたい。事実としてそう呼ばれていた蓋然性が高いからである。当然そこには中枢宮殿が

あった。浄御原宮がそれである（注1）。

さて、先の小論の結論を繰り返せば、7世紀半ばから廃都倭京に条里が施行される8世紀半ばまでおよそ百年、大和平野の土地開発は次頁の年表に示す順序で進捗した。

この年表を見てわかることは、大和平野の土地利用の骨格形成は孝徳・斉明朝期の中にある、ということである。白村江の敗戦を画期として以降半世紀、平城京の建設まで大和経営のための大きな投資は藤原宮建設だけである。この大和平野開発の骨格形成に、天智・天武は時代層から見ても全く関わっていない。このことは『書紀』の記事とも考古学的知見とも矛盾しない。尤も、倭京・浄御原宮の位置付けや倭京の施工年代など斯界の歴史解釈とはおおいに矛盾はしている。ここではその詳細は割愛する。拙著を参照されたい（注2）。

◆天武五年は歳新城条

『書紀』天武紀下五年記事に「是年将都新城 而限内田園者 不問公私 皆不耕悉荒 然遂不都矣」とある。天

時代区分		京	宮	記 事
650	倭 一 国 事 業 の 国 土 統 治 時 代	倭	難波宮	645 乙巳の変・この頃倭国難波に遷る
660			浄御原宮	○ 横大路・下ッ道が建設される ○ 倭京が建設される ○ 中ッ道が整備される ○ 大和統一条里が施工される・除倭京
670	唐の 羈 縻 支 配 の 時 代	京		663 白村江の大敗
				667 近江京遷都
				672 壬申乱・天武浄御原宮に入る
680				676 『書紀』新城条★
690	大和朝廷・日本国の時代	↓	↓	686 朱鳥元年 天武没
		倭京	藤原宮	694 藤原宮遷居
700		↓	↓	701 大宝元年・遣唐使
		新益京		
710		↓	↓	710 平城京遷都
		平城京	平城宮	
		↓	↓	

図—大和平野開発年表 筆者作成

武が浄御原宮に入ってから五年、計画して縄張りまでした新しい都城の建設を中止したというのである。ここにある「新城」は研究史上、古くは添下郡新木に当てられ、近年はほとんどの研究者が「藤原京」に当てる（注3）。天武五年前後から「藤原京」の建設が始まったとする根拠にするのだ。しかし、この年表に見るように、斯界はボタンを掛けちがっている。そもそも時代が合っていない。

◆年表の語る新城

さて、本稿ではこの新城のなにものであるかを考えてみたい。天武が「新城」を作ろうとした時点は、この年表の★印の時点である。見れば明らかのように、通説で新城と言われる「藤原京」つまり倭京は、遠の昔に出来上がっている。だから、通説はあり得ない。歴史的にも「藤原京」と言わない謂れはそもそもその建設年代にある。倭京と呼ばれていたのだ。そ

の★時点から後の時代を見てみよう。天武が構想した新城がもしこの★時点以降に実現しているとすれば、候補は二つある。新益京と平城京だ。しかし、新益京は岸俊男以来、「すでにあった京城を拡張した京」と考えられている。これに該当する京は一つだけ、倭京の拡張である。単なる増設部分である新益京を天武が新城と呼んで構想したとは考えられない。したがって、この年表からする合理的な理解は平城京しかないであろう。天武は平城京を造ろうとしたのだ。それには天武生涯のショックングな出来事が関わっていたように思う。天武青年時代の話だ。以下、シナリオスクリプト（注4）風に述べてみたい。

◆乙巳の変と東アジア

天武が天智とともに歴史に登場したのは乙巳の変である。蘇我氏を追いやり、政権を我が物とするクーデターである。しかし、そのバックには倭国があった。倭国は当時、唐帝国の圧力を受けて、国力の充実を図る途上にあった。その拠点が難波津である。列島中央まで倭国中枢を遷そうとしていた。そのバックによって天智・天武のクーデターは成功した。しかし、力が違いすぎた。あるいは、構想していたスケールが圧倒的に違っ

た。片や、蘇我氏の追放と大和政権奪取であり、片や、律令制に基づく国土の一元直轄支配である。天智・天武は倭国に政権奪取の協力は仰いだ、結果、庇を貸して母屋を取られたのである。倭国は難波から大和に進出し、大和王権を懐柔し、大和を支配下に置いた。そして倭国は間をおかず一方で東国・東北を直轄支配地にすべく、幹線道を整備しながら東へ向かった。国―評―里制の導入である。倭国はその一方で、難波・大和で都城の建設を始めた（注5）。難波京と倭京である。洛陽城と長安城をイメージしていたらうか。

◆天武の衝撃・大和平野の開発

開発が始まる。まず、正方位を規矩とした横大路と下ッ道が大和開発の基準となる座標軸として建設された。その交点をベンチマーク⊕として倭京と大和統一条里が施工されたのである。天武はその光景を目の当たりにしていた。そして、この建設過程に強烈なショックを受けたのである。

何がショックか。それはその建設のスケールの違いである。天皇家の宮処の建築とはおよそ規模を異にした、東アジアのスケールと大和盆地のスケールという天と地の差である。

下ッ道は南北20キロメートルを超え、横大路もその直線部分は10キロメートルを優に超える。真北方向に延びる何処まで見渡しても尽きない、想像を絶する直線道路である。この構想力・設計力そしてこれを実現する技術力に圧倒されたであろう。大和朝廷にはない国力・総合力であった。

特に下ッ道は感動的である。幅員25メートルはあろうかという下ッ道は倭京を抜けて真っ直ぐ北に平城山まで、そしてその両側には条里界線が施工されていた。自分たち天皇家とそれを支える豪族の中庭Ⅱ田園と民が、しっかりと倭国によって管理されていた瞬間である。合理的な国土経営の姿を目の当たりにしたのである。

このショックが新城発想の原点ではなかったろうか。「俺が天下を取ったら、これを凌駕する都城を造ろう」、天武の夢である。倭京条坊を抜け、条里界線が施工中の左右に広がる田園を眺めながら、下ッ道を黙々と北に向かつて歩く。そして、平城山に至る。南を遠望して想う。「ここだ！ここに新城を創ろう！」と。

◆激動する東アジア

そこから壬申乱まで雌伏二十年。

その間、東アジアは激動した。倭国は白村江の戦いに大敗した。倭国は以降衰退する(注6)。唐帝国は版図を東北・半島にも拡大し、遼東都護府から熊津都督府さらに筑紫都督府を置いて、敗戦国の羈縻支配を実現した。倭国の首都・倭京はこの時、進駐軍に占領された。大和王権は近江に追い出された。近江大津宮である(注7)。

そして天智・天武は羈縻支配の先兵として、近江令や庚午年籍、あるいは唐官制の移植等々、唐律令に基づいた国家経営を進めた。羈縻支配は以降、順調に進むと思われた。しかし、東アジアは未だ収まっていなかった。白村江の戦いの後、新羅が半島から唐進駐軍を追い出し始めたのである。我が国に入った唐進駐軍も本国との兵站が不安定で落ち着かない。天智が亡くなる。郭務棕も慌ただしく帰る。唐帝国の力に翳りが見えたと、天武は思ったであろう。それは大友皇子にとつても同じ想いであつた。彼は天武よりも先に羈縻支配からの脱却を画策して、反旗を翻したのである。壬申乱。敵は唐進駐軍。戦鬨の正面は近江京―宇治―古京(倭京)のラインである。天武は東部方面軍として迂回して背後から近江京をつく第二戦線を担った。そして、大友皇子の夢は一瞬にして瓦解した。勝者は唐進駐軍である。しかし、同時並行して、

半島情勢は急を告げていた。

◆天武の夢・新城

天武はこのタイミングで大和王権が国家経営を担えると考えたであろう。唐進駐軍は撤兵し羈縻支配は終わるだろうと(注8)。そして、その舞台として、長年の夢であつた平城山の地に「新城」の建設を進めようとしたのだ。条里界線が引かれていたから縄張り易しい。おそらく天武五年までには都城の範囲を決定し告示した。それが新城である。

しかし、『書紀』は天武五年に至って断念したと記す。なぜか。進駐軍・羈縻政策部隊は倭京に残つたのである。天武五年の断念はこのことを示している。断念はしたが、『書紀』がこの時以降、新城について微かに記事にするように、計画は静かに進行していたであろう。羈縻支配は実質的に浄御原律令の制定まで続いたのではない。羈縻支配が明示的に終焉したのは朱鳥元年、天武待望の「飛鳥浄御原宮」の命名の時であろうか。結局、新城は天武生前には間に合わなかった。

◆平城京遷都

機が熟したのは大宝元年から2年

にかけてであろう。唐帝国武則天に倭国併合・国土統一を報告し、大和朝廷は冊封体制下の朝貢国となった。このお墨付きのタイミングで、平城京遷都を実行したのである。決まれば速かつた。元明天皇の和銅3年、あつという間に遷都した。それはすでに新城の設計と現地縄張りが天武の時代に出来上がっていたということであろう。

なぜ、易々と軽々に遷都できたか。藤原宮には思いがあつたが、他人様が造つた倭京には何の未練もなかつた、ということであろう。藤原宮に関わる一切合切を平城京に移した。この執念が何よりもこのことを物語っている。他人様がおつくりになつたものはどうぞご勝手に。余談になるが、法隆寺はそのような一例として、あるじが居なくなつた倭京に放り出された法興寺を貰い受けたのであろうか。

◆伏せられた半世紀

この半世紀の歴史は『書紀』も『続日本紀』も書かない、いや、書けなかつた歴史である。この五十年は天皇王権にとつて、消してしまいたい歴史ではなかつたか。倭国が大和を席卷した。さらには唐帝国の羈縻支配下に入った。天皇家一元支配が神武

天皇から継続しているとする建前からは、何としても伏せ通したい歴史ではあつたろう。まさか、遺構事実が白日の下に晒され、伏せていたものが頭になるとはそれこそ彼らにとつては青天の霹靂・想定外の出来事であらう。これが藤原宮内先行条坊の発見であり、倭京実在を明かす始まりとなった。

2024/02/15 了

―注―

注1 拙著『実在した倭京・藤原京先行条坊の研究』ミネルヴァ書房 2021 第4章で明日香村岡地区の宮殿遺構は律令宮殿であるべき飛鳥浄御原宮ではあり得ないことを説いている。

注2 筆者前掲書『実在した倭京・藤原京先行条坊の研究』の主題である。藤原京条坊(先行条坊)は藤原宮のための条坊ではなく、更に時代を遡ることを説いている。

注3 西本昌弘「天武紀の新城と藤原京」『日本古代の王宮と儀礼』塙書房 2008 49頁―

注4 ドラマの脚本のこと。筆者が天武の心情を推し量つたという謂であり、このような体裁とした。

注5 【補注】岸俊男「日本における『京』の成立」『東アジア世界における日本古代史講座』6 岩波書店の中で次のように述べる。日唐の地

方行政組織を比較すると、唐は長安城の内外を問わず州(府)―県―里制であるのにたいし、日本では京―条―坊制と国―郡(評)―里制の二本立てで、京と国とは対応する行政単位であつた。したがって京の成立も、当然藤原京以前に実現したと考える。

天武紀には京・京師がしばしば畿内と並称され、また新益京の語そのものが、それ以前に京が存在したことを示す。『書紀』天武五年是歳条、十一年三月甲午・己酉条にみえる新城は「新しい都城」を意味して、京城をもつた行政区画としての、いわば新倭京の建設がすでに計画されたのであろう。

注6 【補注】倭国の戦のあり方から見て、白村江の戦いも倭国王は先頭に立つたであろう。『旧唐書』『列伝劉仁軌伝』は泰山封禅の儀に戦つた相手国の酋長を扈從させている。その中に倭の酋長もある。倭王は捕囚の身であつたと考えられる。この先、唐帝国の官僚・都督倭王として我が国に戻されたと思われる。筆者前掲書終章271頁。

注7 中村修也『天智朝と東アジア』三栄出版 2015 「はじめに」の中で「大国と戦って敗戦すれば、占領支配を受けるといった戦争の法則から外れることはないはずである」と述べる。著書はこれを原理に書かれて

いる。烽・山城は進駐軍の情報網であり、近江京は天智が大和から追い出された京であるとする。筆者も同意する。なお、白村江の敗戦以降の歴史理解は、中村修也に負うところが大きい。

大宮姫伝承を訪ねて

東久留米市 村田智加子

一、旅の始めに

二月初旬に鹿児島を巡る旅をしてきました。友人のMさんが人生一度は開聞岳を見てみたいと言われたことから実現した三泊四日の旅行です。開聞岳と聞くと、古田史学の会が出版した論文集「倭国古伝」の中の『大宮姫と倭姫王・薩末姫』という正木裕さんの書かれた話を思い出します。

鹿児島県指宿の開聞岳の麓にある薩摩一宮「枚聞神社」の縁起の中に、枚聞大神とされる大宮姫の伝承が記されているそうです。それによると白雉元年(六五〇)薩摩の磐屋で生まれた大宮姫は僧に育てられ大宰府から都に上り、一三歳の時に天智天皇の皇后になったとあり、日本書紀の中には倭姫王、続日本紀では薩末姫として記録されているのがこの

注8 前掲書の中で中村修也は、天智朝までで羈縻支配は終了したと考えている。筆者とは理解を異にする。なお、引用した論文、書籍などの著者名は全て敬称を略させていただいた。謝してご寛恕を乞う。

大宮姫であることを論証されている論文です。大変面白く印象に残っていたので、今回の鹿児島の旅で開聞岳に行くことになり、大宮姫の伝承に何か触れることが出来ないかと思つたのです。

白村江の敗戦から壬申の乱の激動の時代、ドラマチックな生き方を強要された倭王朝(古田武彦氏はこの倭王朝が九州にあつたと提証されています。)の姫が最後に生まれ故郷の開聞岳を望む地に戻り、仮殿が開聞岳の麓に造られ、その「方十町の宮殿楼閣」は「上都に準じ数十の官舎が薨を連ねる華麗なもの」だったと「縁起」に残ると紹介されていました。

大宰府だと思われる本城に移つてからもこの仮宮を離宮とよび三十余年を過ごしたそうです。

その論文の中に「指宿市開聞十町京田」という地名が書かれていました。古地名には、正史には書かれていないけれどそこに生きた人々が確かに居たと思わせる力があります。今までもいくつかそういう古地名に触れることができました。

「十町京田」という大宮姫が暮らし、たことを想像させる地名が指宿に今に残っているならば、それはおよそ千三百年以上昔の大宮姫の伝承がにわかに関実味を帯びて私たちの目に広がることであり、ならばその地にぜひ立って歴史を実感してみたいと思ったのでした。

二、伝承地を求めて

三泊四日のよくばり旅行でそれぞれ行きたいところを出し合い、旅行社の中村さんに丸投げしてぎゅっと詰まった充実した旅行計画を作ってもらいました。私たちの幸運だったことは、お互いの行きたいところを全部カバーする旅行計画が持てただけでなく、鹿児島に住むMさんの友人のHさんご夫妻が四日間全行程をご自分の車でご案内下さったことです。

Hさんは鹿児島の方ですが、住んでおられる町は鹿児島市内から離れ

ており、私が指宿の「十町京田」という地名の場所を探していると知ると、指宿市教育委員会の文化財の担当の電話番号を調べてくれました。Hさんはこのほか私の巨木好きを聞いて、ご自分で調べた私の知らなかった巨木の森を持つ神社をもいくつか案内して下さいました。

車の中から何回か教育委員会の方とやり取りの後、指宿考古博物館の方と話すことが出来、大宮姫に関する資料は殆どないが指宿商工会議所の出している「指宿まるごと博物館ガイドブック」へいぶすき検定公式本にわずかに載っているという情報を得ました。さっそくHさんの車で商工会議所に行き、一冊千円のガイドブックを手に入れることが出来ました。この本は指宿の自然、歴史、文化、産業・経済の案内本になっている175頁の検定本で博物館の方が中心になって作られたと聞きました。一つの町でこのような本を作るのを私は殆ど聞いたことがありません。自分たちの町に対する愛情と誇りを感じました。

この本を見る前は「開聞十町京田」の地に立ちたいと思ったのですが、このガイドブックを見ると大宮姫が上陸したという「皇后来」(こうらい)という浜があり、大宮姫が都から運ん

できた大甕二つ、その一つは枚聞神社にありもう一つは運ぶ途中に割れてその割れてしまった坂が「亀割坂」という名前が残っていると知り、そこも見たいと思ったのです。私の興味だけであちこち行ってもらうのは心苦しいと思ったのですが、同行のMさんもHさんご夫妻も面白がつて下さって、先に立って探して下さいました。

三、開聞十町京田

「指宿市開聞京田」の表示は、池田湖まで四キロの観光案内所近くに立っていました。辺りは周囲がなだらかな山波で田園風景が広がっていました。「方十町」を今の長さで考えて良いならば、一キロ四方よりも広い面積です。開聞岳を望み数十の華麗な官舎が立ち並ぶ古代のこの地はどんなにのびやかで美しい景色だったろうなと想像しました。

近くに「玉の井」という豊玉姫が化粧に使った伝説の残る古い井戸がありました。大宮姫が近江から戻って上陸した牟瀬浜と豊玉姫が海底の宮からやって来て上がったという伝説のある無瀬浜と同じ浜であることから、この「玉の井」の伝説も大宮姫の話と混じっている可能性もあると思いました。この井戸は今埋ま

って使えませんが、この近くには水が豊富で流しそうめんが有名などころがあるとHさんが言われていました。もう少し神社に近い町に入ると大きな道路の交差点の名前が「指宿市開聞十町」でした。

ガイドブックによると、指宿には十町、十二町があり昔は十九町もあったということ。中世の田畑の広さを意味したものと、書いてありましたが「縁起」の中に書かれているのは「方十町の宮殿楼閣」という距離の単位の十町です。古代離宮のあったこの土地の広さが中世の頃「十町」という地名になったのだらうなと思いました。

「京田」とは「都のような宮殿楼閣のあった場所がその後田畑になったところ」と思っていて読んではいたが、あとで論文を読み返すと「縁起」には「京殿」とありました。「甕割坂」が「亀割坂」に変化したように同音異義語の変化がおこっていたんですね。

四、枚聞神社

薩摩一宮の「枚聞神社」は論文では「ひらさき神社」とふりがなが振られ、「かいもん神社」とも、と書かれていましたが、今回頂いた「枚聞神社由緒記」には「ひらさき」とありまし

た。ここでは大宮姫が持ってきた大甕の一つがあるというのを見たいと思います。鳥居をくぐると右手に宝物殿があり自由に拝観出来ました。

酒甕と言われるその甕の形は、口

の部分から斜め下に向かって急斜面で側面が張り出し、上から三分の二程のところから急に角度が内向きに変わって内側に向かい、小さな底に膨らみを持ちながらしぼむ形で私はあまり見たことのない形です。良く見る甕の形はこの甕のような途中の段差(?)はありません。縦横同じメートル位の大きさでした。甕の蓋の上に「酒甕老口」と書かれた説明の木札が立っていました。

「此の甕は天智天皇の皇妃として迎へられた大宮姫命が近江の国から御帰国の際お持ちかへりになった酒甕二口の中の一口でありまして、一口は持ち運びの途中山川町の内かめわり坂の処で割れ一口が届けられたのでありますが、これも正治元年(約七百五十年前)暴風のため破損したので、その翌年紀の国に於て模造したものが現存するこの甕であります。」この木札の記述には実在の正治という年号が書かれ(一九九九年)、破損した理由、その翌年に模造品をどこでつくったかまで書いているので信憑性の高い記録だと思えました。

この神社の祭神は当然天照大神でしたが、天智と大宮姫の伝説も「由緒記」の最後に書かれていました。姫が郷里に戻った後、天智天皇は姫を慕って薩摩にやって来てこの地で亡くなったという伝説です。

枚聞神社のあまり人の立ち入らない裏の森にも、ものすごい楠の巨木が何本もありました。マムシ草もたくさん咲いていました。この神社の歴史がかなり遡ることがこの森だけで良くわかりました。

五、亀割坂

そのもう一つの甕の割れた亀割坂はどこにあるのか、枚聞神社の宮司さんに尋ねると山川高校のそばに坂がありそれではないかと言われ、ただ亀割坂という名前ではないと言われました。車で探していくと山川高校の辺りから道が下っており、先に進むとこの坂はかなり長い大きな坂だとわかりました。こんな坂なら甕が転がっていくのは当然だねと皆で納得したのですが、最後の日に、ガイドブックを紹介して下さった博物館の方に挨拶しようと寄った時、待っていて下さったかのように芸員の方が地図を持ってきて亀割坂だと思っている位置の辺りを説明して下さいたのですが、私たちがここだよね

と盛り上がっていた場所とは違うようでした。地図を見ても私にはその位置がはっきりわからず時間がなく詳しくお聞き出来なかったのは残念でした。

六、皇后来

大宮姫が開聞岳を舟で回って仮宮に入られるために上がった入り江を人々は「皇后来」と名付けました。「皇后来」を、「ごら」となかなか読むことは出来ませんが、その漢字を見るだけでここに皇后が来たのだなとわかります。この地はスマホで検索できました。私以外のスマホ検索の得意な方たちがあつちだ、こつちだと車が一台通れる位の枯草茂る道を探しながらゆっくりと走り、簡単な道路地図の看板のあるのを見つけました。Hさんの御主人が進入禁止の看板もある急坂を歩いて海辺に降りていかれ、小さな鳥居のある石の祠を見つけて下さった時は嬉しかったです。私の足ではその坂を下りるのもためられました。ゆっくりと下りて小さな鳥居の先のこれまた小さな祠に、割れた石の塊があるのを見ました。はっきりとはわかりませんが、何かの像が二つに割れて転がっているように思えました。祠の後ろには、黒っぽい石が何かの形に見

えてこれは仏像かなと思ったのですが、「皇后来」を見つけたら嬉しさが祠の後ろの自然石までそう見させたのかもしれない。この入り江は大きくはないけれど長い間人が利用してきた浜だと思えます。今は利用されてはいないように見えました。急坂を上って看板のあるあたりを良く見ると、浜へ降りる急坂をはさんだ反対側の草むらに「皇后来」と白いペンキで書かれた鹿児島県の木製の看板がありました。その説明によると

「天智天皇の後大宮姫が志賀の都から伊勢を経て海路九州に下り山川の牟瀬の浜にお着きになった姫はしばらくその地に滞在されていたがいよいよ開聞の鳥居ヶ浜に新築される仮宮殿にお帰りになるため、牟瀬の浜から舟で開聞岳をまわられて脇浦の入り江にお着きになったという。以来この入り江を皇后来(ごら)という。」とありました。

「皇后来」を見つけた達成感に皆で満足した気分、車窓から大きな開聞岳とそのまえに広がるスナップエンドウの畑を眺めました。

七、天智と大宮姫の伝承

Hさんが予定にないところを幾つか連れて行ってくれましたが、どこ

も天智天皇と大宮姫の伝承が残っていました。

創建一三〇〇年を超える掛宿神社（いぶすき神社）は女性の方が守っていました。祭神は（こ）も天照大神、いかに大和朝廷の支配が行き届いたかわかりません。ここにも天智天皇の伝承が残っていました。大宮姫については書かれていませんが豊玉姫と玉依姫を祀る境内社がありました。

よく整備された「てんちの杜」（現代の命名）と名付けられた神社の裏の森には創建の時八本の楠を植えたという伝説がありますが、特別に巨大な八本の楠以外にも何本もの大きな楠が元気に茂っていました。資料には巨大楠は樹齢千年と書かれてはいますが神社に言い伝えられた話を信じるならばこの大楠たちはもしかすると大宮姫の生きた時代と重なるかもしれません。

戦時中、武の神様と言われて沢山の人がお参りに訪れたという一般に釜蓋神社と言われる海辺の面白い神社にも行きましたがここにも天智と大宮姫の神社創建伝承がありました。

また大宮姫と伝承地の重なることが多い豊玉姫を祀る神社が、知覧のはずれにあり、村の鎮守の神様として境内に水車で動くからくり人形の伝統文化も残していました。畑の中

に突然鳥居の立つこじんまりした、しかもかなり古そうな豊玉姫の墓といわれる場所などもあり、鹿児島には古代が現代にとけ込んだ不思議な風景が沢山ありました。

論文の最後に大長元年（七〇四年）、天智が薩摩にやって来たことが書かれた「縁起」を紹介しています。大宮姫と別れた天智は耐え難く、馬に乗ってやって来た。枚聞神社で頂いた由緒記にも書かれている通りです。滋賀の近江宮にいた天智の姿がある時見えなくなり、いくら探しても見つからなかった。消えた跡に履物だけが残っていたという不思議な話でもあります。

枚聞神社の境内にも平成十一年製の新しいものではありませんが、天智が大宮姫を慕って薩摩にやって来た時乗っていた白馬の世話をしたという、馬所役を務めた子孫の方々が奉納した神馬の像があるのも不思議なことでした。

正木さんはその「縁起」の記事は、一一世紀末頃、僧皇円が書いた「扶桑略記」という歴史書の中の「二云」に書かれた文を引用、創作されたものと言っています。ただ「イチニイワク」記事も何かをもとにして書いたのでしょうかがもう確かめようがありません。

この九州年号最後の年号と言われている「大長元年」という日付は、時代の違う古資料二つに出てきますが、両方とも七〇四年を指していることは間違いなく「縁起」の編者がこの記事の処に何の根拠もなく創作したとは考えられないという疑問も正木さんは提示されています。

鹿児島島の風景の中でこの話は私の想像を広げました。沢山の人を殺して生きてきた天智は人生の終りにすべてを投げ出して最後に静かな暮らしを求めたのではないかと、それには大宮姫のいる薩摩に行くことが一番だったのではないかと。全く根拠のない妄想ではありますが、あちこちに天智と大宮姫の伝承が残っているのはそのせいじゃないかと思つて。不思議の残る薩摩の風景の中で古代の物語を想像しました。

八、旅の終わりに

「勝者が勝者のために綴った史書と敗者あるいは史書の作成を許されなかった人々の伝承に秘められた歴史の真実」という「倭国古伝」の巻頭言に載っている言葉は確かにそうだと思います。伝承は全てが真実とは思いませんが、豊かな内容が含まれていることも事実です。敗者の歴史は大勢の人々によって千年以

上語り継がれ受け継がれ、今に残っていることを感じる事が出来た旅になりました。

旅の手引書を作ってくれた中村さん、四日間その手引書をもらすことなくそれ以上の案内をして下さったHさんご夫妻、私の大宮姫探索と一緒に面白がってくれた同行のMさんそれに旅を広げてくれたガイドブックをご紹介下さった方々、本当にありがとうございます。心よりお礼申し上げます。

（了）

旅を終えて宇佐八幡の放生会に触れている本を読みました。養老四年（七二〇）隼人が再び反乱をおこし、それを抑え込むために大和朝廷は宇佐八幡に協力を要請、女禰宜であるハトメが八幡神の「御杖」として先陣に立って戦った。戦後、八幡神は多くの隼人を殺したことに對する滅罪のため放生会を催すよう託宣。

宇佐神宮の近くの丘の上には、隼人たちの霊を祀ったという百体社、隼人たちの首を埋めたと称する凶首塚なる古墳が今も残っているそうです。

この時、もし大宮姫が生きていたならば七〇歳になりますが「縁起」では天智天皇は慶雲三年（七〇六）、大宮姫は和銅元年（七〇八）五九歳でな

くなつたとされています。続日本紀の中で隼人たちに担ぎだされた薩末姫としての大宮姫は、近江から戻って三十余年を過ごした後半には、大和朝廷に抵抗する戦の旗頭に立たされることもたびたびあったろうとは思いますが、この時の大勢の隼人たちが殺される場面は見ることなく、開聞岳の見える離宮で穏やかに静かに暮らした日々があったのだと千三百年前に生きた一人の女性、大宮姫を想っています。

もう一つ、是非書いておきたいことが出来てしまいました。二月末の古田会の折、京都の「古田史学会報」最新号を頂きましたが、そこに「暗文土師器」が指宿の「尾長谷迫遺跡」で、七世紀の開聞岳噴火層の下から見つかったという新聞報道についての正木さんの報告がありました。「隼人の領域で畿内の役所と関係の深い暗文土師器の出土は『ありえない』と報道されたと思われる」ということです。ますます「縁起」に書かれた大宮姫、倭姫王、薩末姫は「史実に基づかない創作」ではないということが明らかになるようで楽しみです。

古代都市成立の指標 ― 都城論争の収斂を求めて ―

京都市 古賀達也

一、律令制都城の「絶対5条件」

昨年十一月に開催された八王子セミナー(注①)で、七世紀における律令制都城の「絶対条件」として、わたしは次の5点を示し、少なくともこれら全てを備えた遺構が王都王宮候補になり得ると発表した(注②)。そして、この5条件全てを満たす七世紀の都城は難波京(前期難波宮)と藤原京(藤原宮)だけと結論づけた。

【律令制王都の絶対5条件】

- 《条件1》約八千人の中央官僚が執務できる官衙遺構の存在。
- 《条件2》それら官僚と家族、従者、商工業者、首都防衛の兵士ら計数万人が居住できる巨大条坊都市の存在。
- 《条件3》巨大条坊都市への食料・消費財の供給を可能とする生産地や遺構の存在。
- 《条件4》王都への大量の物資運搬(物流)を可能とする官道(山道・海道)の存在。
- 《条件5》関や羅城などの王都防衛施設や地勢的有利性の存在。

このような方法を採用した理由は、

『日本書紀』などの文献解釈を第一義にすると様々な解釈が発生し、その解釈(自説)に都合のよい考古学的出土事実のみを特筆大書し、不都合な事実を無視ないし軽視する(紹介しない・勉強しない)という論者の恣意性を排除できず、いつまで論争しても真実へと収斂しないことを危惧したためだ。そこで、研究者が合意できる「律令制都市存立の必要条件」と誰もが知りうる「考古学的出土事実」にのみ基づいて、九州王朝都城を探るという、この方法を提起したものである。

二、古代都市成立の考古学指標

これには先例があつた。近年の考古学論文にも引用される、「古代都市」の指標(必要条件)として提唱された「G・V・チャイルド(注③)の古代都市成立の十基準」、およびそれを発展させた諸指標である。

チャイルドの「古代都市」の指標とは次の十基準だ(注④)。

(一)大規模集落と人口集住

(二)第一次産業以外の職能者(專業の工人・運送人・商人・役人・神官など)

(三)生産余剰の物納

(四)社会余剰の集中する神殿などのモニュメント

(五)知的労働に専従する支配階級

(六)文字記録システム

(七)暦や算術・幾何学・天文学

(八)芸術的表現

(九)奢侈品や原材料の長距離交易への依存

(十)支配階級に扶養された專業工人

この十基準は西アジアの初期「古代都市」の指標(必要条件)であり、たとえば弥生時代や古墳時代以降の日本列島の都市の指標としてはそのまま採用しにくく、内外の考古学者からは新たな指標が提案されてきた。南秀雄氏の「上町台地の都市化と繁多湾岸の比較 ―ミヤケとの関連―」(注⑤)には次の例が紹介されている。

○M・E・スミスによる初期都市・初期国家形成における根本的プロセス・最重要基準(注⑥)。「番号はチャイルドの基準提示順」

(一)規模と人口密度

(二)恒常的專業者の存在

(三)税の収奪

(四)支配階級の形成

(十)血縁より地縁に基礎をおく国家組織

○エジプト考古学者 M・ビータクの9項目。

(1)高密度の住居(1軒当たり5人以上、人口二千人以上)

(2)コンパクトな居住形態

(3)非農業共同体

(4)労働・職業の分化と社会的階層性

(5)住み分け

(6)行政・裁判・交易・交通の地域的中心

(7)物資・技術の集中

(8)宗教上の中心

(9)避難・防御の中心

○都出比呂志の都市の指標(注⑦)

(I)様々なセンター機能の発達

(II)過度の人口集中

(III)自給自足性の喪失と外部依存

このように考古学分野では、「世界的標準」を学問の方法に採用したり、援用しながら、研究や自説の構築、仮説の論議・検証を進めている(注⑧)。こうした研究姿勢をわたしたち古田学派でも見習うべきではあるまいか。なお、わたしが提起した「七世紀における律令制都城の絶対5条件」は、九州王朝(倭国)による律令制(評

制)統治に不可欠な条件を、史料(エビデンス)が豊富な八世紀の大和朝廷(日本国)における律令制統治の実態から抽出したものだ。そして、これら5条件はそれぞれ独立しているが、「系」として互いに必要不可欠な条件として連結していることを重視した。

本稿は、この十余年、古田学派内で続いてきた、七世紀での九州王朝(倭国)の王都王宮の所在地論争(注⑨)を収斂させるための問題提起でもあり、特に前期難波宮九州王朝王宮(複都の1つ)説に反対する論者からの批判・批評を願っている。[令和六年(二〇二四)四月二日、筆]

(注)

①正式名は「古田武彦記念古代史セミナー2023」、公益財団法人大学セミナーハウス主催。

②同セミナーでのわたしの演題と論旨は次の通り。

《演題》律令制都城論と藤原京の成立——中央官僚群と律令制土器——

《要旨》大宝律令で全国統治した大和朝廷の都城(藤原京)では約八千人の中央官僚が執務した。それを可能とした諸条件(官衙・都市・他)を抽出し、倭国(九州王朝)王都と中央官僚群の変遷、藤原京成立の経緯を論じる。

③G・V・チャイルドについて、ウィキペディアの解説を転載する。

ヴィア・ゴードン・チャイルド(Vere Gordon Childe、一八九二年四月十四日～一九五七年十月十九日)

は、オーストラリア生まれの考古学者・文献学者。ヨーロッパ先史時代の研究を専門とし、新石器革命(食料生産革命)、都市革命を提案した。また、マルクス主義の社会・経済理論と文化史的考古学の視点を結合させ、異端視されたマルクス主義考古学の提唱者でもある。

④Vere Gordon Childe (1950), The Urban Revolution. The Town Planning Review 21.

⑤南秀雄「上町台地の都市化と繁多湾岸の比較——ミヤケとの関連」『大阪文化財研究所紀要』第十九号、二〇一八年。

⑥SMITH E. Michael (2009) 'V. Gordon Childe and the Urban Revolution: a historical perspective on a revolution in urban studies. Town Planning Review, 80(1) (訳:南秀雄、

「V・ゴードン・チャイルドと都市革命——都市研究の革命に対する歴史学的展望」『大阪文化財研究所紀要』第十八号、二〇一七年)

⑦都出比呂志「都市の形成と戦争」『考古学研究』四四巻二号、一九九七年。

⑧古代都市論の諸研究については、小泉龍人「都市論再考——古代西アジアの都市化議論を検証する——」(『ラーフィダーン』第XXXIV巻、二〇一三年)を参照した。

⑨わたしが関わった都城論争では、次の論文を発表した。

○「九州王朝の筑後遷宮——高良玉垂命考」『新古代学』第四集、新泉社、一九九九年。

○「太宰府『倭の五王』王都説の検証——大宰府政庁編年と都督の多元性——」『多元』一六四号、二〇一二年

○「古田先生との論争的対話——『都城論』の論理構造——」『古田史学会報』一四七号、二〇一八年。

○「難波の須恵器編年と前期難波宮——異見の歓迎は学問の原点——」『東京古田会ニュース』一八五号、二〇一九年。

○「『倭の五王』時代(五世紀)の考古学」『八王子セミナー2021 予稿集』二〇一二年。

○「大和『飛鳥』と筑紫『飛鳥』」『東京古田会ニュース』二〇三三号、二〇二二年。

※前期難波宮関連の拙稿リストを次の論文に掲載したので、参照されたい。

「九州王朝の両京制を論ず(一)」——列島支配の拠点「難波」——『多元』一七九号、二〇二三年。

【中大兄の暗殺は「濡れ衣」方式】

中大兄の殺戮の共通点は殺害対象者に対して「皇位を傾ける意志をもっていた」と、謀反の濡れ衣を着せることにある。乙巳の変は殺戮後の告発だったが、以降は濡れ衣のかぶせ方がだんだん巧妙になってくる。

中大兄の殺戮には決まったパターンがある。中大兄が殺害のターゲットとする人を含めて数人が謀反の準備をする。↓そのうちのひとりが中大兄に密告する。↓中大兄は謀反を企てたグループを一網打尽にするが密告者は罪を免れる。

【古人大兄謀反発覚事件】

このパターンの最初の例が古人大兄謀反発覚事件である。

孝徳大化元年九月十二日、吉備笠臣垂は自首して中大兄に「吉野古人皇子は蘇我田口臣川掘等と謀反を企てています。私もその中に加わっていました。」と告発した。中大兄は、すぐに出兵して古人皇子等を討伐させた。この事件には後日談がある。仲間を裏切り中大兄に密告した吉備笠臣垂は『続日本紀』天平宝字元年十二月条に、「大錦下笠志太留、吉野大兄が密を告げし功田二十町。告げたる

微言は尋ねるに露験に非ず。大事を云ふと雖も、理軽重すべし。令に依るに中功なり。二世に伝ふべし。」と記されている。吉備笠臣垂が自ら進んで密告したことが百年後に評価されているのである。状況からみて、吉備笠臣垂が潜入捜査をしたか、あるいは古人大兄らに謀反計画をたきつけ合意を得たところで密告するという段取りだったのではないかと推測される。そのことが百年後も称賛されるということは、価値観や倫理観が奈良時代になっても継続されているということだろう。

【蘇我倉山田石川麻呂謀反発覚事件】

孝徳紀ではひと通り改新の詔が記述された後、大化五年三月二十四日条に、蘇我倉山田石川麻呂大臣の謀反計画発覚事件が記されている。倉山田大臣の弟蘇我臣日向が中大兄に「兄が皇太子を殺害することを計画しています。」と密告する。中大兄はその訴えを受けて、天皇の命で使者を出し倉山田大臣に真偽を確認させるが、大臣は天皇に直接返答すると伝えて使者への返答を二度にわたって拒否する。その後、天皇は挙兵して倉山田大臣を攻撃すると、大臣側は天皇に逆らうことはせずに妻子もろ共自害して果てたという。密告者の蘇我臣日向はその功績によって、筑紫太宰帥に栄転している。日向は中

大兄と中臣鎌子が乙巳の変の準備段階で蘇我山田石川麻呂を仲間に取り入れるために石川麻呂の長女を中大兄に嫁入りさせようとした時に長女を姦淫した「身刺」その人である。

【有間皇子謀反発覚事件】

斉明四年十一月、天皇が紀温湯に行幸している時に蘇我赤兄が有間皇子に天皇の悪行を並べて謀反をそそのかすと、赤兄を信賴している皇子は提案された具体的な計画に同意したと書紀は記す。赤兄は皇子が自宅に帰ったところを見計らって急襲、皇子を逮捕し紀温湯にいる中大兄のもとに送致する。皇子は中大兄の尋問を受けて有罪が確定し藤白坂で絞首されてしまう。

『日本書紀』の中で最も悲しい説話として語り継がれるが、中大兄のマッチポンプ殺人であるというのが大方の見方であるし、『日本書紀』自体の文脈も同様である。蘇我赤兄は天智時代に左大臣にまで出世することになる。

【謀反の濡れ衣を着せる手口】

この三つの事件の手口はすべて共通である。狙いを定めた相手に使者を遣わして謀反を起こすことをそそのかす。相手が少しでも同意を示す兆候を見せた段階で中大兄に密告、謀反の濡れ衣を着せて兵をあげて襲撃し自害させるか逮捕して殺害する。

それぞれの事件ではすべて密告者が『日本書紀』に記されている。古人大兄事件には吉備笠臣垂、蘇我倉山田石川麻呂は弟の日向、有間皇子事件では蘇我赤兄である。吉備笠臣垂は天平宝字元年に密告の功によって功田二十町を賜与されている。蘇我倉山田石川麻呂事件の蘇我日向は筑紫帥に栄転、有間皇子事件の蘇我赤兄は天智朝で臣下としては最上位の左大臣に上り詰めている。密告者は皆天智が即位するために欠くことができない功績を挙げたということだろう。斉明の崩御後中大兄はそれでもまだ即位することができず、称制期間を七年間費やすことになる。

【天智一族の伝統となった殺害方法】

競争相手に謀反の濡れ衣を着せて殺害する方法は中大兄から息女の持統に受け継がれ、さらに奈良時代になつてからも有力者殺害の常套手段になっていく。持統は所生の草壁皇子の競争相手である大津皇子に謀反の嫌疑をかけて逮捕し処刑している。大津皇子に欺かれたとして逮捕された中に壱伎連博徳が含まれているが、大宝律令の撰定に加わっている。「欺かれた」と記される博徳は大津皇子を「欺いた」に違いない。奈良時代に入つてからの長屋王殺害、橘諸兄殺害なども同じ手口で行われており、殺害方法は受け継がれている。

東鯢へとうてい人と倭人

八尾市 服部静尚

一、東鯢人とは東に居る呉の人
東鯢人の初出は『漢書』です。

◆『漢書』(西暦七五〇八八年頃成立)地理志燕地に「楽浪の海中に倭人有り、百余国に分かれていて、時節ごとに朝見に来た。」と倭人の紹介がありますが、同じ地理志の呉地(揚子江河口周辺の地域、南京・上海などを含む)には、「会稽(かいけい)海外に東鯢人有り、二十余国に分かれていて、時節ごとに朝見に来た。」と、倭人と東鯢人を対比するかのような記述があります。

会稽とは現在の寧波(にんぼう)市周辺の地名で呉地と言うよりは越地と思われれます。そして会稽海とは東シナ海と考えられます。東シナ海のさらに向こう側に東鯢人が居て、時節ごとに朝見に来たということですが、古田武彦氏は鯢の魚へんは名産であつて是の意、つまり「はしつこ」、東の端つこの人と理解されたのですが、そうでしょうか。普通に考えて東鯢人とは「東に居る鯢人」の意ですが、『漢書』よりも古い成立の『戦国策』には、次のように「鯢」が出てきます。

実は「鯢」の字は古文獻にあまり出てくる字ではなくて、わずかに魚種名としての鯢、東鯢人、そしてここに出てくる鯢冠だけなのです。

◆『戦国策』(紀元前七七年〜紀元前六年の成立)「被髪(髪を結ばず)文身錯臂(ひじに青い入れ墨をして)左衽(左前に着物を着る)甌越(おうえつ)之民也。黒齒彫題(黒に染めた歯と入れ墨をした額)鯢冠(ちゅうこん)紕縫(ちゅうほう)ちゅうつしゅうつ(鯢の皮をもち栗で縫って作った冠をかぶる)大呉之国也。礼服不同其便一也(越の民と呉の国とは、礼と服は違うが、はかるところは同じである)」「甌越の甌はかめ、甕を用いる人の意か?」

これより、鯢人＝呉の人、東鯢人＝東に居る呉の人を意味すると見るのが妥当と考えます。

二、倭人は周の大伯の子孫と自称し、夏の小康の子と同じ断髪文身の風習を持つ

呉の祖とされる大伯は周王朝の初期紀元前十二世紀・紀元前十一世紀頃の人物なのですが、『翰苑(かんえん)』(唐の時代の百科事典のような書物)が引用する『魏略』に倭人が大

伯の後裔と称しているとあります。

◆『魏略』(三国時代の歴史書、陳寿の『三国志』より成立は古い)逸文には、「(倭人の)男子は皆入れ墨をしてゐる。彼らは自らを太伯の後裔と称し、昔、夏の小康の子(無余)が会稽に封じられた時に蛟龍の害を避けるために断髪文身したが、今、倭人もまた入れ墨して水害をはらう。」とあります。

◆『三国志』(西暦二八〇年以降の成立)魏書・東夷伝倭人条にも、「(倭人は)男子は大小なく、みな黥面文身する。」「夏后小康の子は会稽に封ぜられ、断髪文身して蛟龍の害を避ける。今、倭の水人は潜つて魚蛤を捕るのを好み、文身は大魚・水鳥を威圧するためのものだったが、後に次第に飾りとなった。諸国の文身はそれぞれ異なり、左右・大小、尊卑によつても差がある。」「その道里を計ると、まさに会稽東治の東にある。」と、さらに詳しく記述しています。

小康の子の蛟龍の害を避けるための断髪文身は、『史記』に越の話として出てきます。

◆『史記』(紀元前九二〜八九年成立)「越王勾踐世家第十一」では、「越王勾踐(こうせん)、その先祖は禹の後裔にして、夏后の帝、小康の庶子である。会稽に領土を与えられ、祖先の禹の祭祀を行い守った。身に入れ墨を

し、髪を切り、草の荒地を開いて村とした。その後、二十余代を経て允常(いんじょう)に至った。允常の時、呉王闔廬(こうろ)と戦い、互いに怨んで攻撃しあつた。允常が亡くなり、子の勾踐が越王となった。」同じく「趙世家第十三」には、「翦発(断髪)文身 錯臂左衽甌越之民也。黒齒彫題 卻冠(後ろに垂れた冠) 紕紕(もち栗で縫う) 大呉之国也。」

つまり、倭人は呉の子孫と称し、越と同じ風習を持っていたこととなります。

三、東鯢人の国、夷洲へいしゅうと澶洲へたんしゅう、夷洲は台湾ではない

次に、東鯢人と夷洲と澶洲、そして倭人との関係を考察します。『後漢書』(西暦四三九年頃成立)東夷伝倭人条の最後の方に、

◆「会稽海外に東鯢人有り、二十余国に分かれていたが、それとは別に夷洲と澶洲が有る。伝えて言うには、秦の始皇帝が徐福(じょふく)に子供男女数千人を率いさせて海路蓬萊神仙を求めよう派遣したが果たせなかった。徐福は罪に問われるのをおそれ帰らずこの洲に留まった。代々受け継がれ数万家あり、その人民は時おり会稽の市にやってくる。会稽東

治（とうや）県の人で、海行中に風に流されて澶洲に着いた者がいるが、所在地はあまりにも遠く往来することはできない。」とあります。

つまり、東鯤人の国として夷洲と澶洲があり、そこには徐福の子孫が居て時おり会稽に商いのためにやって来る。中国側からは遠くて往来できていないということです。

そして、『三国志』呉書・呉主伝、および陸遜（へりくそん）伝によると、

◆陸遜伝「黄龍元年（二三九）孫権は偏師（五〇人程度の兵）を遣って夷州および朱崖（しゅがい）（雷州半島または海南島）を取ろうとして陸遜に相談した。陸遜は『今、軍事が連続して兵は損滅し、陛下が心労の末に夷州に遠征して兵を求めようとする気持ちも解ります。ですがその利点は見えず難破の危険が付きまとい疫病の怖れもあります。不毛で損失・損害が多い未来しか見えません。しかも珠崖の民や兵を得ることができてもその兵は役に立たないでしょう。』と反対した。にもかかわらず、

◆「黄龍二年（二三〇）春正月、孫権は將軍の衛温・諸葛直に甲士一万人を率いさせて夷洲及び澶洲を求めた。夷洲は海中にあり、長老が『秦始皇帝が徐福を遣わし童男童女数千人を率いて海路で蓬萊神山及び仙菓を求めさせたが、この洲に留まって還らな

かった。世々相承して数万家になり、その人民が時に會稽に至って商いをする。また、會稽東県の人が海行して風に流されて夷洲に至る者もいる。』と伝えて言う。（孫権が派遣した兵も）夷洲へは所在絶遠でついに至ることができず、ただ夷洲の数千人を得て還った。」とあります。孫権は前年の陸遜忠告を聞かずに、夷州・澶洲に遠征させて失敗したのです。

陸遜伝では夷州および朱崖とあるのに、呉主伝には夷州・澶洲とあることより、後述の市村氏は澶洲＝朱崖とし、敷衍して夷州＝台湾と解釈されたのですが、後述のように当時朱崖はそこに到れないような絶遠の地ではありません。故にこの解釈は否定されます。

そして、増田修氏は『隋書』にみえる流求国―建安郡の東・水行五日にして至る海島』市民の古代第十五集一九九三年の中で、次のように『元史』編纂時には元朝は今の台湾を瑠求と考えていて、『隋書』以来の流求は今の沖縄であることを知っていたとします。全く同意できるのです。

◆『文献通考』一三二七年などに「（流求）澎湖（台湾島の西にある島）と煙火相い望む」とあることより、琉球とは台湾のことだとする説があるのに対して、一三六九年成立した『元史』

瑠求伝には「瑠求は、南海の東、漳州・泉州・興州（現在の福建省莆田）・福州の界内に在り。澎湖の諸島は瑠求と相對するも、また素より通ぜず、……漢唐より以来、史の載せざる所なり。近代の諸蕃の其の国に至るを聞かず」と記述し、元代の瑠求は『隋書』の流求と異なる国としている。

四、福建・台湾領域と広東・海南島領域の当時の状況

市村瓚次郎氏は『唐以前の福建及び台湾に就いて』東洋学報一九一八年で、『山海経』海内南経の「甌（おう）居海中。閩（びん）在海中 其西北有山。」などの多くの文献を引用して、閩および（閩越の都であった）東冶は沿海にあつて、そこから海路交州（ベトナム北部）まで達することができたことなどより、東冶を福州辺り、閩越は浙江省の東南部と福建省の北部を国としていたと推察します。そしてその西北には二千 m 級の仙霞（せんか）嶺の山脈があつて交通を遮断している。そのため秦漢以前は海上交通しか無かったので、海中にある地方と見なしていたのではないかとします。漢は閩越を平らげたのですが、その人民を江・淮（わい）の間に移したので、閩越は虚となりこ

の地を統治の外に置いたのではないか、異民族に接触するような所に設置する南部都尉を置いたことなどより前漢の時代には少なくとも福建地方は（もちろん台湾を含めて）化外の地だったとします。

対して広東地方には、江南から江西南昌府から南安県まで水路、そこから標高三〇〇 m 程度の大庾（たいゆ）嶺を越えると、あとは水路で広州に達せれるというように、古来より交通は容易でした。広東が早くから知られていたから、瓊州（けいしゅう）島（海南島）も早く知られ、前漢が南越国を滅ぼした翌年の紀元前一〇年に、そこに珠厓郡と儋耳（だんじ）郡を設置しています。もちろん孫権の時代にあつても、そこに到達できないような絶遠の地ではなかったのです。

五、夷洲、澶洲および東鯤人とは

以上、孫権が派遣した夷洲は数千人の捕虜を連れ帰ったことより、おそらく沖縄と考えられます。そうすると、澶洲は九州・四国・本州の太平洋側にあった国と考えられます。これらの国々の人民が東鯤人であったということになります。東鯤人の祖先には、呉および越地方から渡った人々に加えて、徐福に象徴される秦

の時代に大陸より渡った人々を含んでいたと見られます。彼らは時には会稽にやってきて商いをしていたわけです。

孫権の時(二三〇年)には往復できなかったのですが、山梨県西八代郡にある鳥居原狐塚古墳から、「赤烏(せきう)元年(二三八)年」魏の景初二年にあたる)五月廿五日丙午造作明竟百鍊清銅服者君候宣子孫寿万年」と言う呉の年号を含む銘が刻まれた

神獸鏡が出土していますし、兵庫県宝塚市の安倉(あくら)高塚古墳から「赤烏七年(二四四)太歳在丙午時加日中造作明竟百口漳服者富貴長樂未央子孫」と復元される紀年神獸鏡

が出土していますので、その後往來に成功したかも知れません。しかし、『三国志』には二三〇年以降、孫権が亡くなる二五二年まで瀟洲への渡航記事は見えません。故に会稽を訪れた東鯤人が持ち帰った可能性も考えられます。

六、東鯤人の中にも倭人の中にも呉の出身の人がいた

ここで気になるのが、倭人が周の大伯の子孫と自称し、夏の小康の子と同じ断髪文身の風習を持っていたことです。文献からは倭人も東鯤人も同根ではないかと考えられるので

す。

例えば、日本列島の太平洋側に居た人を東鯤人、日本海側および対馬海峡周辺に居た人を倭人と言ったのではないかと考えられるのです。なお、『翰苑』に「(三韓)境は鯤壑(ていがく)に連なり」とあるので、三国時代になると、東鯤人は日本海側まで拡大または移動していたかも知れません。

倭人が呉の出身と魏が知った時、呉の出身である倭が魏に臣従すると聞いた時、魏側としてどのように感じたのか、想像を超える喜びがあったのではないのでしょうか。

◆『三国志』倭人条に「正始八年(二四七)倭女王の卑弥呼は狗奴国の男王卑弥弓呼と和せず、倭載斯・烏越らを帯方郡に派遣して、相攻撃する様を説明した。(王頡は)塞曹掾史(さいそうえんし)の張政らを派遣した。それにより詔書、黄幢をもたらし難升米に授け檄文をつくり告諭した。」

とあり、古田武彦氏は卑弥呼と対立していた狗奴国を東鯤人の国(銅鐸を祭器とする城國、親吳国と提起されましたが、この解釈には次の疑問が残るのです。

① 孫権の軍が未だ到達・帰還できなかった瀟洲が果たして親吳国だったのでしょうか。

② 東鯤人の国(例えば瀟洲)が狗奴国だったと断定するには未だ根拠が薄いと考えられます。

③ 瀟洲は九州・四国・本州の太平洋側にあった国とすると、銅鐸を祭器とする城國と合致すると言えるのでしょうか。

記紀の皇統譜にいた倭の五王

大田区 橋本正浩

プロローグ

我が国の歴史書である、古事記と日本書紀には、中国の歴史書に出てくる古代の王の名前がありません。

私は、これは、記紀の編纂の目的と経緯からしてやむを得ないことだと思っていましたので、記紀は意識的に皇統譜からこれらの王を外していると考えていました。

しかしどうも、そうではないようなのです。記紀の皇統譜には彼らがちゃんと書かれていたのです。

九州にその基盤を発祥した「やまと(倭国)」は勢力を徐々に拡張して東北南部までをその支配領域として

いて、更に、倭国(古事記)も日本國(日本書紀)もその皇統譜は同じですから、どこかに彼らが書かれているのは当然のことだったのです。

後で確認できると思いますが、古事記が我が国の皇統譜を意識的に作り替えました。

今の時点で言える、我が国の皇統譜の中で創出されたと思われる王は、神武帝・神功皇后(息長帯比賣命)・允恭帝・安康帝です。

神武帝を創作したのは、九州発祥の我が国を近畿発祥の國にするためです。

神功皇后、允恭帝、安康帝を創作したのは、我が国の歴史を古くから続いていたとするためでしょう。

以下に逐次、中国史書に出てくる我が国の王と、記紀の皇統譜との比定をして行きます。

A. 古代の中国史書にある我が国の王と思われる名前の考察。

1. 卑弥呼

「ひみこ・ひみか」は固有名詞ではないと思います。

「ひみこ」は「日巫女」で「ひみか」は「日(ひ)靈(み)原始的な靈格・威光」か(目に見える状態を表す接尾語)でどちらも普通名詞です。

2. 壹興

「いよ」は「いや(益々・更に)」で「次の」という意味です。

即ち、倭人伝の記述「復立卑弥呼宗女壹與年十三為王」は

「復、卑弥呼の宗女(同じ宗派の女)壹與(次の)年(とし)十三を立てて王と為す」で、これも名前ではないと思われる。

3. 倭の五王
後述します。

4. 「タリシホコ」

「たりしほこ」は「垂(た)りし杵」で、我が国の「国生み神話」の一場面「いざなぎ命」が、杵で掻き回して島の「我が国」を作った場面の、自分はその「杵」であると言って、それを名前にしたようです。

尚、我が国の天皇の多くに「たらし」と言う言葉が使われていますが、これもこの神話から取っていて、「たらし」は「垂らされた」という神の行為(杵を垂らされて我が国を作り出した)を表す敬語です。

5. 「きみ」

当時の高貴な夫人は「きみ」と呼ばれていたようですから、使者が咄嗟にこたえたものでしょう。

6. 「りかみたふり」

これは古田説が有力です。即ち

「利(もうけ・まうけ…皇太子)上塔の利(皇太子)」です。

この「上塔」については種々の考え

があるとは思いますが、私は敏達紀十四年(585年頃)の記述に「大野の丘に塔を建てて法会を行った」とあり、馬子の息子の善徳が推古四年に寺の司を拝命した、とある事から、これが「上塔」ではないかと考えています。

7. 「倭の五王」

先ず、倭王武から取りかかります。倭王武を記紀にある「雄略帝」に当ててのが、現在、衆目の一致するところでしょう。

その理由は雄略帝の倭名です。「大泊瀬幼武(わかたける)命」とあり、この「たける・武」をもって名前とした可能性が強いと思われるからです。年代的にも「倭王武」が朝貢した478年(昇明二年)頃は雄略帝の活躍した時代、と記紀共に主張しているようです。この478年を覚えておいてください。基準点の一つです。

8. 「倭王讚」

「讚」という字の意味は「ほめる」です。

「ほめる」と言う意味に近い我が国の大王は「ほむたわけ命」です。「ほむた」と言う意味は「輛(とも・うで・ひじ)のことのような記述が書紀にありますが、古語として「ほむた」は「輛・とも」だと言う確認は出来ません。一方、書紀は「ほむた」を「誉田」と表記しています。「誉」という字も

「ほめる」と言う意味です。ですから、「ほむたわけ尊」が倭王として「讚」を名乗った可能性が高いのです。

9. 「倭王珍(彌)」

この王は、宋書では「珍」とされていますが、梁書では「彌」とされています。

宋書は5C末から6C初頭の成立で、梁書は唐代で7C初頭の成立ですから、今回の考察では、より同時代に近い資料として宋書の「珍」を対象とします。

「珍」は「めずらしい」という意味です。我が国で「珍しい名前の大王」と言えば「大雀命」でしょう。この大王は書紀では「大鷦鷯尊」とされていますが、風土記では「大雀命」と表記されていますから、本来は古事記の言う「大雀命」で間違いなさそうです。

「鷦鷯(さざき)」は「スズメ目の小鳥で、雀よりやや大きめ」とされています。書紀の編者が、字面を考えて「雀」を「鷦鷯」に変えたのかも知れません。あるいは、古事記の仁徳帝に関する詩に「おほさやき」と言う言葉が出てきます。古事記はこの「や」の音を「邪」で表記しているのですが、書紀の編者は、この「邪」を「ざ」の音としていることから、「おほさざき」としたのかも知れません。

宋書に依れば、この倭王の朝貢年

月が書かれていませんから、「珍」は直接使者を送っていない可能性があまりです。その場合、次の朝貢倭王の「済」の情報に依るものかも知れません。

又、「珍」は「讚」の弟と宋書にある一方、記紀では仁徳は応神の皇子となっています。

私は宋書の表記が正しいと思います。何故かと言えば、記紀では応神と仁徳が髪長媛を二人で取り合っていた物語があります。二人は実は兄弟ではなかったかと疑っております。

10. 「倭王済」

「済」は「ます」と言う意味があります。「ますます」は「いやいや」に通じます。

この意味の倭名の大王は「いやほわけ命」です。書紀は「いざほわけ尊」としていますが、前の「大雀命」を「大鷦鷯」としたとき同様に、書紀が「邪(や)」を「ざ」と読んだために「いざほわけ」と読んで「去来穂別(いざほわけ)」と漢字表記したのだと思います。

「いやほ」は「更に優れた・益々優れた」という意味です。

11. 「倭王興」

「興」は「さかえる」と言う意味があります。

「いやほわけ命」の弟の「みづはわけ命」の「みづは・瑞齒」と言うのは

「長命・めでたい」と言われている「齒」の事だそうですから、「みづはわけ命」が「興」を名乗った可能性は高いと思います。

以上、倭の五王に当たる記紀での五人の大王は、「ホムダワケ命、大雀命、イヤホワケ命、ミヅハワケ命、ワカケル命」の五人と言うことになります。恐らく、ワカケル命はミヅハワケ命の弟でしょう。間にヲアサヅマワクゴ宿禰とその皇子を挿入して、改変されたのです。

B. 記紀と宋書などの整合性

応神から雄略までを倭の五王に比定したときの記紀と中国史書との矛盾点を整理します。

宋書によれば、倭王讃の朝貢は永初2年(421年)で倭王武のそれは昇明2年(478年)ですから、その間は57年間になります。しかし、書紀の治世表記に依りますと、応神から雄略までの治世を合わせますと、207年間にもなってしまうのです。そこで視点を変えてみます。日本書紀には、応神の母とされている神功皇后紀に倭人伝の卑弥呼に関する記事が引用の形で記載されています。その引用文は、『神功皇后紀三十九年』魏志では明帝の景初三年(239

年)六月に倭の女王が大夫の難斗米たちを郡(韓半島にあった中国の郡)に派遣して、天子に朝獻することを求め、太守の鄧夏は役人をつけて都まで送った。』です。

このほかにも神功紀40年(魏志の正始元年(240年)と同じく43年(正始四年(243年))でも卑弥呼関連の記事が倭人伝から引用され、記載されています。

このことは、書紀が気長足姫を卑弥呼に対比させて、倭国には神がかった女王がいたようだが、日本國にも気長足姫という神がかった女王がいた、と主張し、なおかつ、卑弥呼と気長足姫は同時代の人と思わせようとしているようなのです。

即ち、神功皇后は239年頃の人のように思わせようとしているのです。倭人伝や宋書の記述から卑弥呼の朝貢の239年から倭王武の朝貢の478年までの間隔は239年になります。

先ほど応神から雄略の治世を足すと207年間と言いましたが、少し明るさが見えてきました。気長足姫は応神の母ですから、この207年間に気長足姫(神功皇后)の治世を足すと267年になるのです。神功皇后の治世は60年とされ、雄略のそれは23年ですから、例えば、神功皇后20年から雄略15年の間は239年

です。それぞれの治世期間中の年次を選べば、卑弥呼の朝貢と倭王武の朝貢の間隔239年に合わせる事が出来るのです。

このことから、記紀は共に応神の時代を160年ほど遡らせていたことが判るのです。

何故でしょうか。それは我が国の歴史が古くから続いていたと主張するためだったと思われます。

もう一つの矛盾点、記紀では応神、仁徳、履中、反正、允恭、安康、雄略です。記紀では応神と雄略の間に7人の大王が居るのに対して、中国史書では倭の五王の5人は連続しています。勿論、記紀の7人も連続しています。

そこで、先の倭名からの考察から外れた允恭と安康の倭名を見てみると、允恭は「雄朝妻稚子宿禰」とあり、安康はその皇子とあります。

「宿禰」というのは我が国では摂政を表します。即ち、大王ではないのです。この二人をあたかも大王として挿入して、神功皇后を卑弥呼の時代の人にするための増量剤にしたのです。この二人を除いた、応神から雄略までの5人が倭の五王の対象者として良いようです。と言いますのも、記紀では気長足姫は新羅を攻めていますが、新羅の建国は4C末から5Cと思われるから、卑弥呼の時代には

新羅は未だ無いのです。即ち神功皇后の新羅征伐の説話は5Cの話なのですから、本来で言えば、その皇子の応神が倭王讃として宋に行った時期は5Cで、宋書の記述とぴったりに合っているのです。

即ち、古事記は息長帯比賣を創出して卑弥呼になぞらえ、5C前半の応神から5C末にかけての雄略までの五人の王の間に允恭と安康という二人の王を創出して挿入し、実際とは異なる、より長い皇統譜を作り出したのです。

日本書紀は、更に加えて、各王の治世期間を記し、神功皇后が卑弥呼の時代に居たと思わせるような調整を行っていたのです。

以上、今回の各王の倭名から考察した仮説は、皆さんが納得と言うわけには行かないかも知れませんが、一つの考え方にはなるかな、と思います。

エピローグ

我が国の応神から雄略までの5人の大王が、何故、わざわざ漢字一字の名前にして朝貢したのかを考えますと、我が国は漢の時代から中国の南朝で漢の系列の王朝が途絶えるまで、中国王朝に朝貢していました。即ち、我が国にとってその王朝は宗主国な

のです。当然、従属国の立場として、宗主国に合わせた名乗りをしなければならぬと思つた結果ではないでしょうか。

事実、その後、鮮卑族出の隋の煬帝に対しては、対等な國として、堂々と「たりしほこ」と名乗つて交流をしています。同じく鮮卑族系統の唐に對しても、決して卑下した態度は見せていません。

尚、蛇足ですが、言うまでもなく、紀元前一千年に稲作が伝来していた我が國が、その頃から中国と交流があつたのは明らかで、我が國の為政者の間では、漢字は教養の一部であり、又外交にはなくてはならない知識だつたのです。当然、室見川の銘板が語るように「大篆・小篆・隸書」の知識は持つていたのですから、倭名から連想する漢字名を名乗るのに抵抗感はなかつたと思われまゝ。

神功皇后研究(その1) 岩見沢市 和田高明

日本書紀の神功皇后紀には俾弥乎・壹與の事績が挿入されていることが夙に知られております。また、九州の地、特に福岡県・佐賀県には神功

皇后を祭神とする神社は数知れず(図①)、神功皇后にまつわる逸話・伝承も数多く残されておりますので(図②)、それらを辿りながら半島との交渉、新羅侵略に絞つて、倭國の首長(神功皇后に仮託された人物は誰なのか)を吟味しようというのが本論の主旨です。

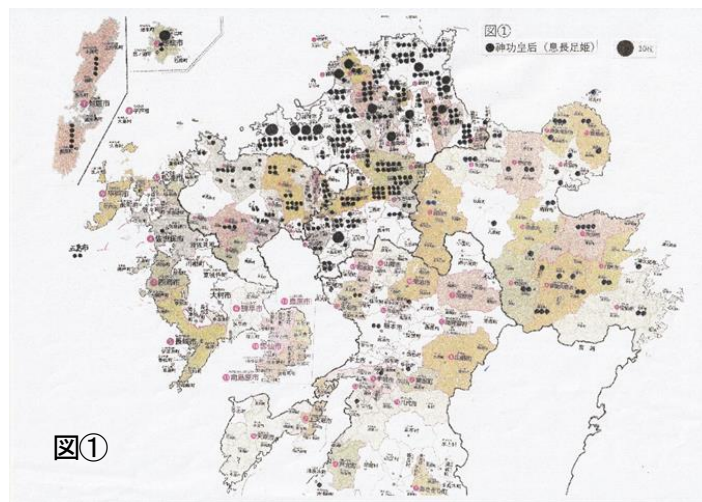
尚、半島の三韓に関する年代は、拙論『三国史記』の実年代を究める』(タゲン一三二〜一三四号「平成二八年三〜七月」)によつて判明した実年代を使用します。

さて、日本書紀における神功皇后の摂政期間は東方年表を基にすると西暦二〇一年〜二六九年、没年令百歳となります。

摂政前紀、仲哀天皇九年二月に仲哀天皇が崩御したときの罪祓と、翌月皇后自らが神主となつて神の審判を受ける儀式を挙行したことは、福岡県糟屋郡小野村大字小山田(現古賀市)の斎宮、山田村(現久山町)の斎宮の縁起に伝承されておりますが、いずれも日本書紀の引用となつております。ここでの神託に関する内容は、古田武彦氏の論する、神話的女王(檀日女王)が北九州統治に乗り出した史実の換骨奪胎とみて切り離します。

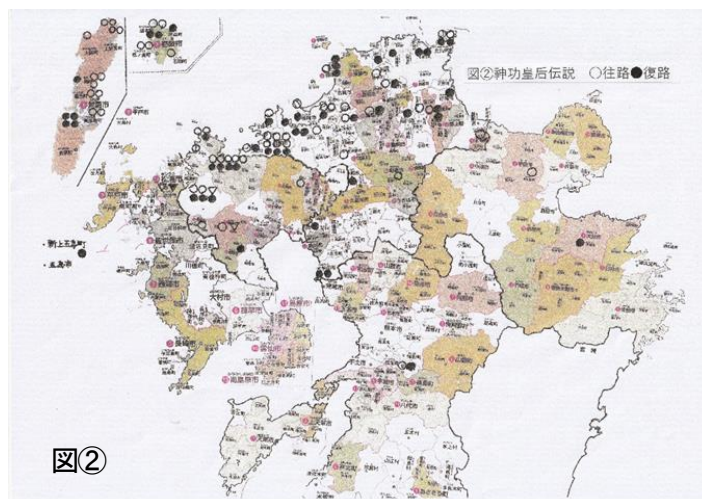
●第一節

仲哀天皇九年四月、天皇没後、皇后は軍船を整えて新羅に渡ることを決し、男装するも軍兵が集まらず、九月、船舶を揃え刀矛を奉納して祈つたところ軍兵が集まつたとなつています



図①

なり天神地祇を祭りて西を征むと思ふとき、軍兵集まり難く、吾婦女なるも仮に男の形をなし、強て雄を鼓し馬に乗り、自ら斧鉞を執りて群臣を従へ、火前國松浦縣より諸國を歴現し此所に来り。海辺の石上に祭りて



図②

が、これを伝える神社があります。

①福岡県築上郡吉富町「八幡古表神社」

旧記の引用として欽明天皇の御代に息長帯比賣の霊が現れ「昔筑紫檀日宮に財國をもとめんとして神宮を小山田邑に造り、親(みずか)ら神主と

財國を得ん事を祈り、此國諸神等を祭る。此後軍兵多に集り、船舶を整へ嶮浪を渡つて三韓を得たりき。」

②福岡県京都郡みやこ町(旧犀川町)「大山祇神社」

社説に述べる所次の如し。「此所に鎮座の大神等は、往古神功皇后三韓

●第二節

同年十月、和珥津より出帆し順風

御征伐の時船を造らせ給ふに、豊前國仲津郡今井津の南方彦山の東北隣に大なる杉山有り。良木多き事を聞こし召され、此山にて造船用の大杉大楠等を伐採し給ふ。殊に御座船の帆柱木を其中にて選ばれたり。最初吉日を選び山口祭あり。次に杣入して木本祭を行はしめ、大山祇の神等を斎鎮め奉れり。夫より村人山靈神社と称へ産土神と崇奉れり。故に村名を帆柱と云ひ、船人の船頭の住居せし所を船頭村と云ひ、杉木を伐たる所を杉山と云ひ、大楠を伐たる所を楠と云ふ。」

③佐賀県唐津市佐志「八幡神社」

「神功皇后征韓凱旋の時、鉾を納めて天神地祇を祭られし所なり。」

①から③をまとめるならば、福岡県東端の吉富町の辺りで軍船の建造を進める一方、男装した女王が各地を回りながら軍兵を募ったところ、兵が集まり半島に渡ることができたという話です。兵隊を募った中心地、つまり当時の都は造船所に近いところと考えるべきです。そうすると、筆者が以前論じた(「神社の向こうに見えてきたもの」『女王の時代』)TAG EN(一七〇号)比賣神の都候補第一である京都郡ということになります。

に乗って新羅に至ったとの記述は次の伝承と一致します。

④老岐市郷ノ浦有安触「爾自神社」

「壹岐國神社誌」社記に曰、神功皇后三韓征伐の御時、老岐島まで軍を進め給ひ順風を祈らせ給ふ時に忽ち東風起り容易に三韓へ御渡海あり。異敵を平らげ給ひ御帰朝の後ここに風の神を斎き奉らしめ給ふ。

⑤1 対馬市上対馬町鰐浦「本宮神社(旧和珥本宮)」

「神社明細帳」神功皇后新羅を征せらるる時の行在所の古跡なり。

⑤2 神社とは別に鰐浦の伝承として「神功皇后の三韓出兵の際、時化の為に避難入港し、軍船を繋いだともづな石」の伝説がある。

壹岐島を経由して対馬の鰐浦から半島に渡ったということです。

⑥福岡県北九州市八幡西区(旧折尾町)「旗頭神社」

社伝曰「神功皇后西夷を征せんと武内大臣をして施主たらしめ新羅に到る。王敢て戦わずして伏す。高麗百濟の二王も亦懼て和を請ふ。皇后凱旋の時に此地に於て宿禰命軍令厳整たり。故にイクサバルと称す。」

さてここからが問題です。日本書紀は、新羅に渡った倭國軍は新羅王を降伏させ、高句麗、百濟も帰順したと記していますが、どの歴史書を見てもこのような事実はありません。

三国史記に初めて倭人が登場するのは新羅第一代赫居世居西干八年(紀元前五〇年修正紀元後一五四年)で、戦闘はしていません。次が第二代の南解次次雄十一年(西暦十四年修正一八五年)のことで、兵船百余隻で沿岸を襲撃しています。その次は第四代脱解尼師今三年(五九年修正二〇八年)、倭國と国交を結び使者を交換しています。どうやら日本書紀の話はこの時のことが基になっていると思われる。筆者の分析では、国交を結んだこの時は倭弥乎の前王の代となります。そして新羅の王子末斯欣を人質にしたとなっていますが、これは第十八代実聖尼師今(西暦四〇二年)が即位した時のことなので、時を隔てた全く別のことを神功紀に続けて記述されていることとなります。

*「居西干」「次次雄」「尼師今」、後に出る「麻立干」はいずれも新羅国王の称号。

扱、同年十二月の後に記されている二つの「二云」について。倭國と新羅とは講和と抗争を繰り返しているもので、三国史記の記述を前述に続けて列挙します。

・第四代脱解尼師今十七年(七三年修正二一五年) 倭人が木出島に侵入し、角干羽鳥が防戦するも戦死。(国交樹立した後何があって国交断絶に至ったのか不明)

・第六代祗摩尼師今十年(一一二年修正二二九年) 四月 倭人が東部辺境に侵入。

・同十二年(一一三年修正二四〇年) 三月 倭國と講和。

・第八代阿達羅尼師今五年(一五八年修正二五七年) 三月 倭人来訪。

・同二十年(二七三年修正二六五年) 五月 倭女王卑彌乎が使者を派遣。

・第九代伐休尼師今十年(一九三年修正二七五年) 六月 倭人が大飢饉の為食糧を求めて千余人入国。

・第十代奈解尼師今十三年(二〇八年修正二八二年) 四月 倭人国境侵犯。伊伐浪利音が軍隊を率いて反撃。

・第十一代助賁尼師今三年(二三二年修正二九四年) 四月 倭人が金城を急襲包圍。王が自ら反撃し撃退。

・同四年(三三年修正二九五年) 五月 倭軍が東部国境侵犯。

・同年七月 伊伐于老が沙道で倭人と戦い倭の軍船を焼き勝利。

・第十二代沾解尼師今七年(二五三年修正三〇五年) 四月 倭人が舒弗邯于老を殺害。

*新羅本紀では三年となっているが、列伝により訂正。

国交が樹立した後関係が悪化、再び講和して国交を再開するのは祗摩尼師今十二年のことです。倭弥乎が使者を派遣するなどしますが、またもや剣呑な関係となり、新羅の首都

金城を攻撃包囲するに到ります。新羅王が登場するのは助賁尼師今で、于老も活躍します。その後王が沾解尼師今に代わった七年に于老が殺害されるのです。

本紀には倭人が于老を殺害したとだけ書かれています。列伝によると、新羅を訪れた倭國使が于老を殺害、味鄒尼師今の代になってから于老の妻が倭國の使臣を殺して夫の恨みを晴らしたとされています。それに怒った倭國が金城を攻撃したが勝てずに退却したのです。于老の軍略に手こずった倭國が暗殺という手段で于老を葬った格好ですが、なぜか于老の敵討ちとなる戦を起したとは記されてはおりません。あくまで一方的だったのでしょうか。

この間に、新羅王が倭國の捕虜となったり、謝罪の為に王妃を殺すなどのことは三国史記に記されてはいません。新羅にとって余りにも屈辱的なことなので記録されなかったのだでしょうか。そして百年以上にわたって起きたことが一度に起きたことのように書かれていますので、日本書紀は切り貼りの「作文」と言えます。従って王が捕虜となったり王妃殺害についてもおいそれと信用するわけにはいきません。

撰政五年三月条の朴堤上による末斯欣奪還作戦は、訥祗麻立干二年(四

一八年)の事件です。

三十九年の「魏志」の記事の挿入は、公孫淵討伐時(明帝の景初二年)の倭弥乎による遣魏使のことで、二三八年に相当します。四一八年の事件の三十四年後の記事が二三八年となっているのです。

四十年、正始元年の魏志は二四〇年の内容。

四十三年は二四三年の倭弥乎による遣魏使です。

●第三節

神功皇后撰政紀四十六年には「百濟肖古王」、四十九年に「王肖古、王子貴須」とあり、五十五年には肖古王薨去、五十六年に王子貴須が王になるとある。百濟第五代肖古王、第六代貴須王(仇首王)のはずです。近仇首王の諱は「須」であって「貴須」ではないのです。肖古王が亡くなり貴須王が即位したのは三〇九年のことです。さりながら、六十四年と六十五年条をみると、貴須王を継いだのが王子枕流王(三九四年)、枕流王の後継が辰斯王(三九四年)で、辰斯王は阿莘王の叔父とあるので(この系譜に間違いはない)、貴須王とは近仇首王のことで、その父は近肖古王ということになるのです。「貴須」と「須」を取り違えています。

五十二年には百濟より七枝刀等が贈

呈される旨の記事がありますが、これは所謂「七支刀」のことで、比流王から倭國王に送られた友好の証と考えられます。三六九年で比流王十六年に相当します。

六十二年の百濟記、壬午年が三八二年ならば、加羅國王己本は三国遺事にある第五代伊尸品王と思われる。

六十六年、晋武帝泰初二年とは二六六年で、遣晋使を送った貴倭女王とは壹與に外なりません。

(以下次号その2に続きます)

「和田家文書と国東半島」の旅に参加して 2024/4/10~4/12

白井市 讚井優子

【はじめに】

東京古田会月例会で(一月二十七日)安彦克己さんが「安倍氏と国東半島」と題して発表されました。和田家文書に書かれた、安倍(安東)氏と九州の国東半島地域との交流が資料に挙げられております。今回の旅は、その資料を基に国東半島を巡り、安倍・安東・秋田氏の痕跡を確認してきました。

今回の報告では、筆者は安倍・安東・秋田各家の年代観は正確にまだ掴めておりません。ご容赦ください。

大まかに安倍は古代、安東は中世、秋田家は近世と考えて今回報告いたします。また安東氏秋田氏は先祖が安倍家であると認識している和田家文書に倣います。

和田家文書(北鑑第6巻陸奥考)には、「祚己丑年(980)、安倍頼良逝きその嫡男忠良五十一歳にして継ぎける：父頼良なる実名ぞ國東と称するは誠なり」とあります。(ちなみに永祚二年(990)に一条天皇が十一歳で元服、藤原定子が入内しました。)国東半島の名前の由来も、この安倍國東に由来すると書かれています。

蝦夷地や樺太、北方民族との交易だけでなく、安倍氏は、南にも進出していたことになります。安倍氏の繁栄には、船による大きな交易事業が浮かび上がります。

安倍氏と九州を結んだ人物がいます。「：陸奥国来朝の主、安東城に在住して国を治めていたころ韓人金濟徳の案内で豊前耶麻國川の港に漂着し：」(資イ) 金濟徳なる人物は新羅系の人であると私は考えます。東北安倍氏、新羅系渡来人、九州国東(あるいは豊前豊後)三者が、私の中で繋がりました。和田家文書によると、渡来人は日本列島へ神(白山神)とともに白頭山から加賀に入り大和に進出、とあります。この件に関して一般書にも同様の記述を発見し(資

へ)、改めて読みなおしたところ、和田家文書に書かれた内容の正当性に気付かされました。

今回の旅に関して言いますと、豊前・豊後は、古代新羅文化が色濃く反映されており、宇佐八幡とも大いに関係がある事(資八)。さらに八幡神と神仏習合の起源が謎となつていますが、神宮寺の弥勒信仰と共に、古代新羅花郎とかかわりを挙げる書物もあります。(資三)。古代新羅は、中国と早くから交流のあった百済や高句麗とは、系統の異なる国で、むしろ北方ステップロードを通じて、ローマ文化に通じていたようです。考古資料にも足跡が如実です。(資ホ)

文末に資料と本を挙げておきました。古代新羅、ステップロード、安東水軍に思いを馳せると、今回の旅も色々発見がありました。

【一日目】

瀬戸内海に浮かぶ姫島めぐり、コース①大帯八幡宮↓昼食↓②観音崎(黒曜石露頭)↓③姫島灯台↓④比売語曾社↓⑤荒神社

姫島は7つの火山によってできた4つの小島が砂州で繋がりの一つの島となりました。三〇万年〜十万年前のことです。

①島で一番大きい神社は、「大帯八幡

宮」。島の産土神社です。竜宮城のようなイメージの拝殿があり、本殿は八幡造りとなっています。境内を掃除しておられた江原不可止(ふかし)宮司に八幡神についてお話を伺いました。八幡神社は、普通「八幡」の上に地名を冠しているが、「大帯」は地名ではない、とのお話も伺いました。当宮司は『東日流外三郡誌』も何冊か持っていて、古田先生の講演会を聞きにいかれたことがあるそうです。

さて名物の車エビの昼食後、電気自動車に分乗し、低速で全島を一周。島の様子がよくわかりました。

②観音崎の黒曜石は、見事な白みがかつた独特の黒曜石の露頭です。これを使つた矢じりは、主に瀬戸内海沿岸から北九州沿岸・河岸の縄文遺跡から出土しています。③島の東端の高台に建つ姫島灯台から、瀬戸内海をぐるりと眺めました。国東半島や、遠く四国などが見えます。姫島が、瀬戸内海航路の良き中継地であることがわかります。船さえ操ることができれば大きな海の道です。

④島の名の由来の「比売語曾社」は島で一番古い神社です。山の上に鎮座していると思いきや、意外にも姫島の北東部、海岸沿いの、そそり立つ岩の裾に鎮座していました。すぐ近くの奥の宮は岩の割れ目の奥に鎮まっています。姫様は鉄漿をしていたよ

うです。それにまつわる伝説の場所拍子水(鉄漿を付けた後、口をゆすぐ)として、手拍子を打って願ったところ、鉱泉が湧いて出た)は、現在隣に村の拍子水温泉健康センター(炭酸水素塩泉)があります。⑤荒神社

訪問。島で一番美しい溶岩ドーム矢筈岳を南西に仰ぐ、大海(おおみ)川を挟んだ小高い山の頂上(大海地区)に鎮座しています。美しい矢筈山を神奈備山として、ここに荒神社を建て、アラハバキの神をお祀りしていたのではないかと、皆川恵子さんが推論していました。いたるところに三つ巴紋。社殿の中に「三宝大荒神」とある幟がありました。姫島には、「船曳祭り」「盆踊り」「荒神祭り」という祭事がありますが、荒神祭だけは、大海地区だけで催される祭だそう。この地区は、島内で大いに水田が広がる地区ですが、最近では減反だそうです。海の幸も豊富で鉱泉もありゆつくり滞在したい島でした。

【二日目】

国東半島六郷満山めぐり、秋田家の紋章、ペトログラフ、コース①桜本宮八幡社 ②文珠仙寺 ③成佛寺 ④山神社(秋田氏の紋章) ⑤ペトログラフ金湧(かなわき)地区 昼食 ⑥修正鬼会で有名な天念寺 ⑦国宝富貴寺 ⑧胎蔵寺と熊野磨崖仏

①国東郷の桜本宮八幡社に詣でました。後一条天皇の寛仁三年(1019)の創立。後に巡る成仏郷の山神社の元宮です。②文珠仙寺、立派な境内、奥宮まで登ります。岩に抱かれるように建つ本堂は、日本三文珠院のひとつ。③成佛寺 六郷満山を開基したと伝わる仁聞菩薩上人が、養老年間に満山二八ヶ寺の僧侶を集めて創始した、五穀豊穰、悪鬼祓「修正鬼会」の祀りの場です。開催するのは、現在三ヶ寺のみ(隔年)。④成仏郷の山神社を訪ねました。「元正天皇養老2年再建桜吹河内の総社であつた。…」とある転郷・移祀碑が、本殿裏にあります。『和田家文書』には国東半島にも大元神社の存在を記しています。この山神社がその大元神社と指摘する、郷土史研究者もいます。

(資イ) 神社拝殿前には秋田家紋「檜扇に違い鷹(鷲)の羽」が刻印された踏み石がありました。違い鷹の羽はよくわかります。さらに扇の左側には、獅子に牡丹と思しき彫刻。上部には、岩木山の形の山を確認しました。皆川さんの発見です。秋田家の紋章については、三春町歴史民俗資料館 資料館の資料館の家紋についての項に、「建久年間(ちようど鎌倉幕府ができた頃)、秋田家の先祖安東太郎貞秀は、何らかの功により後鳥羽上皇に召し出されました。この時上

皇は、丁度、朝鮮国から到来した鷲の羽根二枚を檜扇に載せ貞秀に与えました。それまで、秋田家（安東家）の家紋は「獅子に牡丹」でしたが、この後、「檜扇に違い鷲の羽」が家紋になったのです。とあります。「違い鷲の羽」は本家筋、「違い鷹の羽」は分家が使用とありました。⑤旅行資料には、ペトログラフィの場所は明記されていません。廃校になったバス停留所に「金湧」、その先の川にかかる橋には「かなわきはし」と刻印されて、ここは金湧地区です。（川の上流に産鉄跡でもあったのでしょうか。）安彦さんが率先して、訪ね回って下さり、地元の方（松丸美男さん）に道を伺い



ました。同氏は古代文字を「梵字」とおっしゃっていました。現地まで20分ほどでしょうか、大磐にネットがかぶされていたのを、解いて見せてくださいました。不思議な文字の刻印を、皆で確認しました。山中には他にも大磐があり、松丸さんによれば、それらの大磐にも注連縄をかけ、昔は大切に祀っていたとのこと。山



を下りるとき、松丸家の「松丸家奥津城」とある立派な神道形式の墓のそばを通りましたが、お子さん方は外に出て、「ここは私の代で終わり」と話されていました。今の日本を象徴する出来事にここでも遭遇しました。⑥天念寺。「修正鬼会」に使う大松明が展示されていました。神仏習合の民俗行事とも思われる本物の祭りを見たら迫力に圧倒されることでしょう。⑦国宝富貴寺、高い石段を登ると、

美しい勾配の阿弥陀堂の屋根に息をのみます。現在は、古色蒼然として、落ち着きのある阿弥陀堂・大堂です。創建当時（平安末期）の様子は、熊野磨崖仏と共に、大分県立歴史博物館プロジェクト・マッピングとして再現されており、翌日見学しました。さらびやかな阿弥陀如来と美しい浄土の世界を見ることができました。⑧庄倒される熊野磨崖仏。ここに行きつく迄、大変急で不揃いの石の階段を登りました。この石段は「昼は人が、夜は鬼が作った」と伝えられています。この磨崖仏は日本では珍しい彫り方だそうです。新羅（慶州）に似た技法の磨崖仏がたくさんあるそうです。（資料 P.307）

【目録】

本日のハイライト、宇佐神宮・三礼四拍一礼 御許山登山、大元神社参拝、コース①赤塚古墳、②県立博物館、富貴寺映像見学 ③凶首塚古墳、化粧井戸、④宇佐神宮、昼食 ⑤御許山大元神社、⑥安心院京石 ①県立博物館わきの古墳群を見学しました。赤塚古墳は三世紀後半の古墳です。中国製銅鏡他が出土しています。②博物館学芸員の簡単な説明とプロジェクト・マッピング（富貴寺、磨崖仏）を見ました。③宇佐神宮にお参りする道に沿って、凶首

塚古墳、化粧井戸三基がありました。神聖な道なのでしょうか。隼人の首を葬ったものという言い伝えの凶首塚古墳ですが、時代はもつと古く、この地の豪族の支石墓にも見えました。④時の政權にうまくつながり、武家の守り神として栄えた宇佐八幡は全国の八幡神社の総本社。姫神が大事に祀られています。綺麗な朱塗りの拝殿、さらに壮麗な本殿。

今に残る珍しい拝礼様式「二礼四拍一礼」と拝殿の前に表示がありました。本来のアラハバキの拝礼「三礼四拍一礼」で参拝した方もいらつしやいました。遥拝所から、遠く御許山を拝めます。⑤御許山登山。大元神社は、御許山の9合目にあります。宇佐神宮の第二殿に祀られている「比売大神」（中心に祀られている）の原姿とされる三女神がこの御許山に降臨したとされ、山全体が御神体と言われています。大元神社には拝殿がありますが、本殿はありません。奥に鳥居があり、その先が禁足地となっており、山頂には三女神が依代として降臨したという3個の巨石が祀られているそうですが、見ることはできません。アラハバキの名残でしょうか。さらに山のあちらこちらにある大小の巖には綺麗に注連縄が懸けられ、新しい紙垂がつけてあり、今も信仰が生きていること

を感じました。境内を清掃していらした方に、この山に数々の高僧がおり参りしたことなど伺いました。まことに神仏習合の大元神社です。⑥安心院京石 古代文字はよくわかりませんでした。が、縄文のお祀りを感じました。

【終わりに】

山中の、神社仏閣を訪ね、個人では回りきれないところを、安彦さんに案内していただきました。素朴な信仰に始まり、やがて人が集団で暮らすときに必要な宗教システムが、目に見える形となった神社や寺院、磨崖仏、神仏習合の感のある民俗行事等を見て回りました。急な石段を手すりにつかまりながら上り下りし、昔の人々の精神に、触れたように思いました。

バスの中では、橋本正浩さんより姫島(女島)を詠んだ万葉集、河辺宮人の歌の解説を聞きました。歌の中の姫島は特定されていない、のとこと。

また津軽の玉川宏さんから、壇ノ浦で亡くなったとされている、安徳天皇に関する和田家文書の解説をお聞きました。赤間ヶ関での源平の合戦の後、安徳天皇は、国東の大元神社に逃れ、その後、安東水軍により、東日流に逃れたというもので

す。(和田家文書コレクション231、資料)

今回の旅で、北方津軽と遠く離れた九州が古代から浅からぬ縁があったことを知りました。安東水軍の操船・造船能力の高さを想像すると、古代から連綿とつながる日本列島の歴史が、複合的に見えてきます。海中に浮かぶ姫島を訪ねた時、この海原を航海し、九州から津軽迄移動する安東水軍の技術に思いを馳せました。確かに、安倍・安東・秋田氏は国東半島迄来て、足跡を残していたことに感慨を新たにしました。

【参考資料】

- (イ)東京古田会一月例会安彦克己氏発表レジメ「安倍氏と国東半島」
- (ロ)秋田集史研究会玉川宏氏「和田家文書と国東半島」
- (ハ)岡谷公二「神社の起源と古代朝鮮」新羅からきた神、宇佐八幡をめぐって(平凡社新書2017年)
- (ニ)「朝鮮と古代日本文化座談会」宇佐八幡と新羅花郎(中央公論社1978年) 司馬遼太郎 上田正昭 金達寿 編
- (ホ)由水常雄「ローマ文化王国―新羅」(新潮社2001年)

『和田家文書』備忘録6 佛頂寺跡に建立せし中尊寺 港区 安彦克己

『和田家文書』によれば、平泉の中尊寺は安倍頼良、頼良父子が建立した佛頂寺の跡地に藤原清衡によって建立された、となる。従前、中尊寺が建立される以前に「安日山佛頂寺」があったとする驚きの命題は聞いたことがなかった。

昭和二十五年、藤原四代の遺体調査を契機として中尊寺の研究は学僧佐々木邦世を中心に進展したが、昭和五十八年同師が編纂した『中尊寺史稿』には当の佛頂寺は出現していない。(注1)

師は「後記」に「寺史としての最も重要な一面に欠けている…。それは、学風と法脈についてである。理由は、徴証すべき史料がない。史料が残っていないのではなくて、山に学風なく、法水絶えて佛法伝授の僧がいなかったからである」と来し方の山(中尊寺)の実情を告白している。

『和田家文書』でも命題を明確に示す史料として、管見にして『和田家資料』2に掲載されている史料1「西行旅譜」(注2)だけであった。西行は初度より四〇年後に再び平泉を訪問した感懷を歌僧ならではの小文に残している。その結びに

「日本將軍安倍頼良が發願建立せし佛頂寺跡に建立せし中尊寺…。明日の曉に此の國なる主君藤原秀衡殿の參面許なりて今宵毛越寺に宿す。丙午(一一八六・文治二)筆者注 年十月二日 西行」とある。

筆者が「西行旅譜」を西行自身の記述であると確信したのは、次の件だ。「錦織りなせる四周山々東稻山の紅葉、金鶏山、鐘岳、塔山の老杉老松の間々にまだら銀杏の黄葉、楓の紅葉を背に毛越寺の大泉池を鏡に映す絶景。

何事のおはしますかは 知らねども 忝けなさに 涙こぼるる
伊勢にて詠みにしを再感す。」とある。この「再感す」の表現は、当

人のみが吐露できる心情であろう。「佛頂寺跡に建立せし中尊寺」の歴史を西行は熟知していたに違いない。筆者はこの「西行旅譜」を詳細に検証し、「佛頂寺は中尊寺か」を古田会ニュースに発表した。(注3)

拙論を発表から二〇年余りたった二〇二一年、当会会員藤田隆一氏により原資料(明治写本)がウェブ化され、文字検索が可能になった。改めて佛頂寺を検索し、新たに命題に関する史料四本を見いだした。

史料2 (注4)

「衣川にては平泉中尊寺、前世の

佛頂寺・舞草堂・鬼神堂ありてその栄をなせる處なり。」

史料3 (注5)

「康平元(1068)年の秋、清原氏は、平泉の中尊寺以前に存在したる安倍氏の菩提寺とも曰ふべく佛頂寺薬師堂に…。」

史料4 (注6)

「(基衡は)無量光院を全棟建立了しとき安倍一族の佛頂寺跡に建立せる中尊寺本堂に、一字金輪佛頂坐像と稱す大日如来を安置せり。」

史料5 (注7)

「平泉中尊邸に前世に在りき安倍家寺跡・佛頂寺は跡形なきと相成て、茲に中尊佛頂像を造りて安置せりと曰ふ。 延文二(1357)年二月六日」

『和田家文書』以外の文献からは「佛頂寺」の寺名すら見いだせないでいるが、諸学会が全く触れていないこの命題に関して、都合五本の史料が採録されていたことから、同寺の存在はもはや否定できないであろう。

では、佛頂寺は何故消滅したのか。この答えは簡単である。源頼義、義家の軍勢が衣川に本館をおく安倍一族を厨川まで追い立てた前九年の役(1063)で焼き払われ消滅したこと、異論は無からう。更に頼朝による平泉攻略(奥州合戦)も残余の史料を焼

却してしまったであろうこと想像に難くない。

次ぎに佛頂寺の建立時期について

記年のある史料を挙げよう。

史料6 「寛仁丁巳(1012)年建立 奥州衣川平泉佛頂寺」(注8)

史料7 「治安壬戌(1032)年、日本將軍安倍頼良、是(生保内邑なる四社神社一筆者注)の神像を平泉に建立せし

佛頂寺の守護神とて本堂に安置せるも、天喜丁酉(1056)年その子息頼良討死せし…」(注9)

史料8 「永承辛卯(1057)年、奥州衣川に在りて平泉に佛頂寺を建立」(注10)

史料6・7は安倍頼良、史料8は安倍頼良の時代となるが、この三史料からは建立年を特定することはできない。頼良、頼良父子が君臨する時期に数年をかけて建立されたのであるう。

また、『和田家文書』には佛頂寺の寺名は多く出現する。一例を挙げれば

「(安倍)頼時の寄進になる仏閣は、極楽寺、佛頂寺、淨法寺、西法寺にして、今に遺るは少なし」(注11)など枚挙に暇ない。紙幅に限りがありここでは割愛するが、それらの史料群も「佛頂寺の存在」を示している。

巷間「歴史は勝者が造る」と言われる。『和田家文書』が世に紹介されな

ければ、前九年の役で消滅した佛頂寺の歴史は、学会に「学風無く、法水絶え」てしまったに違いない。

(注1) 佐々木邦世編集『中尊寺史稿』

中尊寺発行 昭和五八年

(注2) ウェブ 『和田家資料』『丑寅日本記 第2』

(注3) 筆者『東京古田会ニュース』

121号 「佛頂寺は中尊寺か」

(注4) (注2)と同じ 「奥陸羽古代史諸證一 衣川鷹巣館之事」

(注5) (注2)と同じ 「安倍古事録 四」

(注6) ウェブ『和田家文書コレクション』

「平泉衣川佛頂寺由来」

(注7) (注6)と同じ「陸奥史審抄全」

「平泉昔灯絶逝」

(注8) (注6)と同じ「東日流六郡誌 6」

(注9) (注2)と同じ「丑寅日本記 第9」

「予言」

(注10) ウェブ『北鑑 第30巻』一

(注11) (注2)と同じ 「北斗抄二」

「東京古田会」月例会報告⑤

※文責：新保高之

【第一部】の進行役は事務局長の斎藤、【第二部】の進行と説明・解説は幹事の新保。

●二〇二四年三月度(三〇日) 堀留町区民館にて、参加者は会場一五名、リモート六名程度。

【第一部】

一・研究発表「倭の五王は記紀の皇統譜の中にいる？」(橋本正浩氏) (1)

発表内容…①五世紀の日本上位人は、話せないが読み書きができ漢字の意味を理解。②中国史書に倣って天皇の和風諡号を「記紀」編者が創作。③神功皇后紀を卑弥呼時代に遡らせたため、応神・雄略の在位年を増し。

(2)質疑等…①鬼道とは、宗女とは、上塔は地名か。②景初二三年の妥当性。③雄略紀に倭王武の記事を一行入れればよかった筈。④五王の一字名と和風諡号との読み・意味の関係資料が欲しかった。(3)感想…驚くべき逆転の発想を支えているのは、当時の日本人が漢字を理解していたこと。※会報第二一六号に当該論稿を掲載。(発表六五分、質疑三五分)

二・懇談会…会報の「字の大きさ」、「横書きと縦書き」の得失。(十五分)

【第二部】

一・勉強会「古田武彦『失われた九州王朝』その五」(1) 対象は、①第四章 隣国史料にみる九州王朝の第一三節。(2) 各節の小項目の要点を抽出して説明。①磐井の「反乱と滅

亡」…継体紀末尾の分注を検証、日本
九州王朝との立場から、「磐井の反
乱」と結びつけて種々論証。②二つの
王朝…『旧唐書』の「倭国伝」は九州
王朝が、「日本伝」は近畿天皇家が対
象として論証を進め、孝徳紀と斉明
紀の遣唐使における倭国と日本のト
ラブル等を指摘。③九州年号の発掘…
『海東諸国記』や『襲国偽僭考』など
から、継体期から文武天皇に至る「九
州年号」の研究史を批判的に検証し
つつ、年号を設定しうる公的権力と
して、九州王朝の実在を論証。(3)
質疑等…「いつ石上神宮にはいつた
か？」に關し、①『書紀』が言えなか
ったのは差し障りがあったから。②
たぐさんの宝物が九州から近畿に移
された。③朝鮮南部を治めたことで
百濟から七支刀を貰った等。(解説・
質疑四五分※映像共有にトラブル発
生)

祖代」は持統紀他に登場。②多禰嶋の
位置「京を去る、五千余里」は筑紫原
点の短里か。③特殊使役動詞「俾」が
推古紀と天武紀に多い。④「蝦夷」は
東北・北海道の民族か。(解説・質疑
五五分)

●二〇二四年四度(二七日) 堀留
町区民館にて、参加者は会場一三名、
リモート六名程度。

【第一部】

一・研究発表「九州王朝一元史観」
を批判する(國枝浩氏)(1)副題「多
元史観を復元・確立のために」。(2)
発表内容…「郡・評」問題に焦点を当
て、古田武彦氏が「日本古代多元史観」
から「九州王朝一元史観」へと傾斜し
ていったとする。(3)質疑応答など…
追加説明した部分に關して、古賀氏
と活発な論争に発展。(発表八五分、
質疑三五分)。

二・懇談会…会場参加者が千葉日報掲
載の「元号「令和」決定から五年(元
号選定の様子)」を紹介。(五分)

【第二部】

一・勉強会「古田武彦『失われた九州
王朝』その六」(1)対象は、第四章
隣国史料にみる九州王朝の第四節
「仏教伝来と任那日本府」。(2)各項
目の説明として、①「仏教伝来」に關

する二つの記事(国内所伝の「戊午」
と『百濟本記』の「壬申」)から、『書
紀』編者が後者を採用した理由を推
定し、『百濟本記』記事が九州王朝に
対するものであると論証。なお、これ
は、仏教初伝の記事ではない。②「任
那日本府」は『百濟本記』に基づくも
ので、九州王朝の機関である。③朝鮮
半島の二つの説話は九州王朝に關す
るもの。(3)質疑等として、『三国史
記』が言う「六七〇年に倭国から日本
国に改称」の真偽。(解説・質疑四〇
分)

二・読書会「岩波文庫『日本書紀』天
武天皇紀下その六」(1)対象範囲…
天武十二年条。(2)内容…①宇治谷
孟編の現代語訳を基に同年記事の朗
読、②該当・留意事項を抽出し説明、
③主要記事は、天瑞重來の詔、大津皇
子が初めて朝政を聴く、銅錢使用詔
三八〜四氏に連を賜姓、都城宮室複
数設置の詔、等。④トピックとして
「天武紀の「詔と勅」」。(3)質疑等…
①元年正月条の「大赦」は駐留してい
た唐軍の帰国と関連か。②孝徳大化
紀にあるべき記事の移入可能性も。
(解説・質疑四〇分)

谷川清隆氏講演会のお知らせ

日時：6月9日(日) 14時30分開演
会場：文京区民センター2A会議室
参加費 1000円

※リモートでの開催はありません

【講演名】天文学と古代史―谷川の
場合―

【講師】谷川清隆氏(国立天文台)

【講演内容(講演者より)】

「天文学」と「古代史」の關係はた
いへん古く、両者の關係を調べる研
究は広い分野となつてゐる。谷川は
そのごく一部を担当している。

七世紀の『書紀』には天文記録があ
り、記録の数が巻に依存して偏つて
おり、しかも観測に基づくものと基
づかないものがある。このことが、森
博達氏による『書紀』の巻々のアルフ
ア・ベータ分類に合致したことから、
谷川らは七世紀に限って巻々の地天
泰分類を提唱した。その後、屋久島と
の交流、遣隋使・遣唐使、冠位、語彙
など地天泰分類に合致する性質を
『書紀』の巻々から抽出した。本講演
では、地天泰分類の現状を紹介し、そ
こから言えることに關して自分の見
解を述べた上で、別の解釈の可能性
を世に問いたい。

東京古田会・月例会

今後の予定

【6月月例会】

【日時】6月29日(土)

午後1時～5時

【会場】堀留町区民館2号洋室

●オンライン参加できます。

【第1部】

*研究発表

村田智加子氏

讃井優子氏

*懇談会 テーマがありましたら

お寄せください

【第2部】

新保高之氏

*勉強会

『失われた九州王朝』その7

*読書会

『日本書記』天武天皇紀その7

●資料は用意いたします。

参加費500円

当日会場にてお支払いください。

研究発表予定

大宮姫伝承を訪ねて

村田智加子氏

『和田家文書』と国東半島の旅に参加して

讃井優子氏

「宇治橋断碑をめぐる」

藤田隆一氏

【和田家文書研究会】

日時：7月13日(土) 午後2時～5時

会場：HPでご連絡します。

*テーマ①国東半島を巡って

②『和田家文書』のクリル族

*報告者：安彦克己氏

●東京古田会のHPが新しくなります。

6月頃をめどに新しいHPに移行となります。判り易い皆さんのHPを目指して、ただ今製作中です。どうぞご期待ください。

【新入会員募集】

東京古田会は新規会員を常時募集しています。古田武彦や古代史に興味のある方、どうぞお気軽にお問合せ下さい。また、入会ご希望の方や、本会にご興味のある知人・友人の方をご紹介ください。入会希望の方は事務局に電話又はメールで住所・氏名等ご連絡ください。年会費は4千円になります。

●「東京古田会ニュース」

原稿募集！

東京古田会では東京古田会ニュースへ掲載する論文・小論・古代史雑感などを募集しています。住所・氏名を必ず明記のうえ、500字から5,000字程度にまとめ、Eメールにて左記へお送りください。ただし、特定個人への中傷や古代史と無関係な場合は掲載をお断りすることがあります。予めご了承ください。また、他紙などへすでに投稿しているものとまったく同じ内容の原稿は原則として掲載できません。掲載の可否については編集会議で決定させていただきます。(Eメールアドレス)

saitaka7078@yahoo.co.jp

川崎市 斎藤隆雄迄

【編集後記】

今のこの時間、大型連休中の平和な日本では想像もできない様な悲惨な戦争がこの地球上で行われている現実。過去を学ぶ者からはなんと哀れな行いかと、糾弾の言葉しか出ないが、当の為政者はまだまだやめないと宣言。この為にいつも犠牲になるのはその国の国民・市民。我々はいったい、いつになったら過去の教訓から学ぶのだろうか。(斎)